



ポケットに、  
夢ひとつ

ESSAY  
Chikara Oishi

## 001 三岸節子展を観る

---

平塚ビーチに友人を訪ねた。真夏のビーチバレーコートで久しぶりにボール拾いをした。幾分、暑さも和らいだ一日。あまり汗もかかず、すがすがしい気分を味わった。

その帰り、平塚市美術館に立ち寄った。ちょっと気になっていた三岸節子展を覗いた。いつも思うのだが、画集と実物との差異に愕然。特に三岸の色と言われる赤の色彩には圧倒された。晩年の幾点かの「花」に描かれた赤よりも、70歳代に描いた「雷が来る」や60歳代の「ヴェネチアの家」の赤がいい。

そんな中で、いちばん心に残ったのは、8年近くアパートの窓から眺めながら描けなかったエッフェル塔が、にわかに雷雲でかき曇ってきた瞬間に絵筆を取ったという「エッフェル塔」。赤は一切使われていないが、画集では絶対に伝えきれない現物のすごさがあった。残された筆致に、画布と格闘した作家の精神が刻み込まれているのが、素人のわたしにもよくわかる。

「三岸節子の作品に近づくと、火傷をしそうだ」と、よく言われるのだそうだが、93歳まで描き続けたエネルギーに触れ、元気をもらった気分。鈍行列車に乗って帰ってきた。

●今日のビタミンP：「幸せ・・・それは私が決して気にしてこなかったことです。たとえ蹴っ飛ばされて

も、私は私がやりたいことをやるべく試みてきました」 [ニキ・ラウダ=元F1レーサー]

## 002 満開のドラゴンフルーツ畑

---

きのう、”元気をもらった”と書いて、思い出した人がいる。M氏といった。スポーツカメラマンだった。それが「元気がもらえないスポーツは、もう撮れない」と、石垣島に移住してしまった。

それから5年。家を建て、土地を買い、今は農作業に精を出す毎日と聞く。でも、カメラは手放したわけではないようだ。忘れた頃に、沖縄の空や海の写真が送られてくる。最新の写真が、この満開のドラゴンフルーツ畑。実は赤と白と黄色があり、切ると、白地に黒ゴマをまぶしたように黒いタネが特徴の果物だ。おいしいが、茎には鋭いトゲが無数にあって、痛い。

彼とは、バレーボールの仕事で、たくさんの土地に行った。オーストラリアのキャンベラ、アメリカのアトランタ、スペインのアリカンテ、イタリアはフィレンツェ、ローマ、ミラノ、フェラーラ、クネオ、モデナ等々。

この頃は、再び、マスコミを賑わすようになったバレーボール（ただし、女子のみ）。今秋11月にはグラチャンという国際大会もあり、再びテレビに釘付けになる日々が続くのだろう。

だが、96年から2000年にかけてのバレーボールの低迷期、「こんなプレーしかできなくて、元気をもらいにくるファンに対して失礼だ」何度も憤っていた彼の言葉を今も鮮明に思い出す。人気は出たけれど・・・、果たして、元気はファンに伝わっているか？ 11月が来れば、それが確認できるはず。だが、まだまだ彼の怒りを収めるまでにはなっていない。

●今日のビタミンP：「サヨナラじゃない。手を振ったのは、彼らが私の人生の一部であり、私も彼らのもの

だからさ」 [A・J・フォイト＝元インディ・レーサー]



## 003 20年前を覚えていますか？

群馬県・御巢鷹山に日航機が墜落し、坂本九ちゃんら520人が亡くなって20年目。今日（8月12日）がその日だというニュースに耳を傾けながら、月日の流れの早さを思う。あのとき、自分はどこで何をしていたのか？

2001年9月11日は鮮明に思い出すのに、1985年の8月12日は思い出せない。

当時、自分は、とある雑誌社の編集部にて、テニス雑誌を作っていたはずだが、その年のウィンブルドンで誰が優勝したのかも思い出せない。

それで、資料『情報コミュニケーションの100年』を引っ張りだしてみると、1985年は、こんな年だったことになる。

- 1月 横綱北の湖が引退
- 3月 つくば科学万博
- 3月 日本人エイズ患者第一号認定
- 4月 電電公社と専売公社が民営化され、NTT、JTとしてスタート
- 5月 男女雇用機会均等法成立
- 6月 松田聖子、神田正輝、2億円結婚式
- 9月 シートベルト着用が義務化
- 11月 プロ野球ドラフトで、桑田が巨人、清原が西武入り

明瞭に思い出すことができるのは、実際に行ったつくば万博と、桑田の巨人入り。あとは記憶に残っていない。

ちなみに、この85年には、マイクロソフトが「ウィンドウズ1.0」を発売し、日本語ワープロソフト「一太郎」も発売になっているが、わたしはまだパソコンを持っていなかった。前年の84年にアップルが「マッキントッシュ」を発売していたが、今も愛用のMacを手にするようになるのは、それから6年もたってからだった。

ついでだから、もう少し書いておく。この85年には、ゲームソフトの「スーパーマリオブラザーズ」が任天堂から発売されている。本格的なファミコン時代の幕開けだった。それが翌86年の「ドラゴンクエスト」発売、88年の「ファイナルファンタジー」発売へと続き、89年のゲームボーイ発売（任天堂）へと発展した。

この85年という年はまた、現在の情報革命の端緒となる幾つかの技術が開発された年でもあった。まず、日本板硝子によって光ファイバーが作られ、光ファイバー通信に成功。8mmビデオとCD-ROMも商品化された。東芝が10万円を切る廉価ワープロ「ルポ」を発売したのもこの年であり、翌86年には日本でもパソコン通信が始まった。

● 今日のビタミンP：「立ち上がって、アイスクリームソーダを買いに街角まで歩いてゆけるというのが、どんなにすばらしいか……キミは知っているかい」（S・N・ベアマン）

## 004 映画『ダウン・バイ・ロー』の魅力

---

何ヶ月ぶりかで、東京にいる土曜日。午前中、すぐ近くの区立中央図書館で調べものをしたあと、久しぶりに映画を観た（DVDで）。観たのは、『ダウン・バイ・ロー』と『ストレンジャー・ザン・パラダイス』。そのあと、高校野球を見て、1日が暮れた。

映画は2本とも、ジム・ジャームッシュ監督の初期の作品で、出世作とっていいものだが、好きなのは、両作品に共通するロビー・ミュラーのカメラワーク。特に『ダウン・バイ・ロー』の町並みや河畔をなめるように追うシーンが、ジョン・ルーリーのけだるいような音楽と重なって心地いい。このシーンとその音楽を確認するために観るようなところがある。

両作品とも、主演は音楽も担当しているジョン・ルーリーだが、わたし自身は、あまり好きな俳優ではない。脇役だが、ルーリーが収監されている牢獄に3人目の人物としてやってくるイタリア移民の青年（ロベルトと言ったか？）に、いちばん好感を持っている。

物語は、ぼん引き容疑で捕まったチンピラとワナにはまって収監された元ディスク・ジョッキーと誤って人を殺してしまったイタリア人旅行者の脱獄劇だ。三人三様の個性のぶつかり合いが好テンポで続き、飽きさせない。無事脱獄に成功した3人だが、一人（イタリア人）は突然恋に落ちた女性とその地に留まり、一人は道の分岐点で左の道を、もう一人は右の道を歩き始めて、物語は終わる。

『ストレンジャー・ザン・パラダイス』のほうも、ルーリーの音楽が効いており、三者三様の再出発で終わる。その、人生の可能性と非現実性を暗示して終わるところが好きなところだ。「明日は誰にもわからないけど、歩き出さなければ」という気持ちにさせる。

● 今日のビタミンP：「動いてこそ人間です。人は動きながら死ぬべきです。動くのをやめると不幸になります」（ジャック・ブレレル＝シャンソン歌手／78年没／ベルギー）

伊豆・下田から少し南下した田牛（とうじ）の入口にあるアーネストハウスに菅野邦彦さんを訪ねた。平日ということもあってか、下田駅から田牛への道路に海水浴客らしい姿は少なかったが、ヘミングウェイのファーストネームを取って名付けられたホテルのテラスには、去りゆく夏を惜しむかのように、多くの若者たちの姿があった。

ジャズファンなら、「スガチン」の名で知られる菅野邦彦さんの名を知らない人はいないだろう。ジャズが日本のミュージックシーンで活況を迎えた60年代、70年代に六本木「ミスティ」、青山「ロブロイ」で一世を風靡した名ピアニストだ。当時、60枚以上のLPがリリースされた。

その菅野さんが黒鍵付きの現在のピアノに限界を感じ、みずから考案し製作した、黒鍵なしの、日本に2台しかないピアノが、このアーネストハウスに置かれている。

そのピアノを前に、この黒鍵なしのピアノによる演奏会を開くのが夢だと語る菅野さんの顔は少年のように輝いていた。

ブラジルに放浪の旅に出たまま7年余、日本の音楽シーンから消え去り、帰国後もピアノから離れてしまったため、伝説の名ジャズピアニストと呼ばれた菅野さんは、今70歳。近年、やっと演奏を再開して、今は月2回、東京・恵比寿の「サンマリノ」に元気な姿を見せているが、この黒鍵なしのピアノ演奏こそ、最大の夢なのだ。

それにしても、目の輝きと肌の色つやは、とても70歳とは思えない。そのことを聞くと、枇杷の実をスライスし、粉末にして、それを飲むようになってから、風邪はもちろん、病气らしい病気はしなくなったと言われた。日がな一日、海に潜り、気が向いたらピアノの前に座るという日常と枇杷が元気の源らしいのだ。

枇杷といえば、皮膚病に悩まされていた父が、枇杷の葉のお灸で、きれいに治してしまったことがあって驚いたものだが、伊豆でも枇杷の薬効は評判なのだと聞いて、その効能を改めて調べてみたいと思った。

もちろん、下田まで菅野さんを訪ねたのは、別の仕事の話があったのことだが、この枇杷の話が最大の収穫だったかもしれない。

●今日のビタミンP：「わたしたち日本人には、遊びにもルールや技術があるというコンセプトが、ひどく欠けている」

石垣島に永住したM氏より、ドラゴンフルーツが届いた。写真では知っていたが、こんなに大きいとは知らなかった。せいぜい卵ぐらいの感覚でいたが、実際に手に取ってみると両手に収まるほどの大きさがある。縦方向に切ってスプーンですくう。シャーベットのよう柔らかな果肉には、爽やかな甘みがあり、おいしくいただいた。果肉部分は真っ白だが、その部分をすくい終わると、鮮やかな赤い皮が現れてきて、それがいかにも南国を感じさせる。

その赤で思い出したのが、しばらく前に平塚市美術館で観てきた三岸節子の絵を彩っていた赤だ。

三岸節子の絵に赤が強烈的な色彩となって織り込まれ始めたのは、64歳になって、フランスに永住覚悟で渡ってからのような気がするが、その決意とこの色はどこかでつながっているのだろうか。生涯、股関節脱臼に苦しみながら、三岸好太郎、菅野圭介という二人との結婚生活という“格闘”の中で、みずからの色彩を獲得していったその生涯は、知れば知るほどすさまじく、生きる勇気を与えられる。64歳から84歳までフランスを舞台に制作活動を続け、94歳まで描き続けた情念にもすさまじいものがある。そのあたりは、吉武輝子と澤地久枝という二人のノンフィクションライターによって書かれた書物に詳しいが、94歳で死を迎える直前まで描き続けた三岸とは対照的に、その絵画に多大な影響を与えたとされる二人の夫は、好太郎が31歳で圭介が53歳で没している。

特に“別居結婚”というセンセーショナルな形で4年間を過ごした菅野圭介という人物とその絵画には、尽きない興味がある。現在はほとんど知られていないその名前もそうだが、絵画も常設展示場さえなく、展覧会もほとんど開かれたという情報がない。北海道立三岸好太郎美術館に200点以上が収蔵されている好太郎、生前に三岸節子記念美術館が生家跡に開館した節子と比べたときの、その落差は何から来たものなのか。赤に特徴づけられる三岸節子に対し、蒼と緑に収斂されたと思われる菅野圭介の色調。その対極ともいえる色彩の対比にも興味が引かれる。

[『炎の画家-三岸節子』：吉武輝子／文藝春秋／2,476円]

[『好太郎と節子-宿縁のふたり』：澤地久枝／NHK出版／1,500円] [『三岸節子-修羅の花』：林寛子／学陽書房／680円]

●今日のビタミンP：「引き留めて悪かったな」「悪いものか。かえって嬉しいくらいだ。食うための仕事に使う時間は、できるだけ少ないほうがいいんだ」「何のための時間なら、いいんだ?」「決まってるじゃないか。人を楽しませるための時間さ」（辻邦生『雨の道』）

## 007 バレーボーラー高橋みゆき選手のイタリア挑戦

日本の女子バレーボール界に久々の明るいニュース。女子日本代表のエースでNEC・レッドロケッツに所属する高橋みゆき選手が、イタリア・プロリーグでプレーすることになり、練習を始めたというニュースを見た。

有名なサッカーのセリエAを範として始められたバレーボールのセリエAは、上位リーグのA1と下位リーグのA2に分かれているが、高橋選手が所属するピチェンツァは、12チームで争われるA1で昨シーズンは8位だった。まだ一度も優勝争いに絡んだことはないチームだが、若手をていねいに育てることには定評がある。2002年の世界選手権で優勝したイタリアのエースでMVPを獲得したトグット選手も、2003年ワールドカップで得点王となったグリーンカ選手（近年躍進著しいポーランドのエース）も、このチームで育った。昨年（2004年）夏、アテネ・オリンピックを前にした日本代表のヨーロッパ遠征時に、栗原恵選手（当時NECで、現在はパイオニア）と木村沙織選手（東レ）に接触を試み、入団の話を持ちかけたのも、このチームだった。彼らは何度も「彼女たちを育てたい」と言った。オーナーが大の日本びいきで、スポーツ分野担当の秘書に日本人を雇っているほどだから、高橋選手も大事に扱ってもらえるだろう。

ただ、そのヨーロッパ遠征の折、イタリア、ブラジル、ポーランドと戦う当時の日本代表チームのプレーを特別席で観戦していたイタリアのリーグ監督たちが、口をそろえたように、「この中で、イタリアのリーグで使えるのは、13番（大友愛選手）だけだ」と言っていたことを覚えている者からすると、複雑な気持でもある。

身長が170cmで、ジャンプの最高到達点も3mに届かない（295cm）高橋選手は、2005年日本代表のメンバー表に名を連ねたときも、誰も注目しなかった。「アテネで終わった」と思われていたし、「せいぜい北京への橋渡し役」、「若い大山、栗原が育つまでのつなぎ」と思われていた。それが、サブキャプテンとして、チームをまとめただけでなく、世界上位12カ国で争われたワールドグランプリ大会の決勝ラウンドで、世界の強打者を差し置いて、最多得点を記録し、まさに世界を驚かせた。

世界からトップ選手が集まるセリエA1の中で、170cmの高橋選手は、ひととき小さなエースアタッカーだ。180cm台が普通の世界の中で、どうやって活路を見いだすか？ “北京を諦めない”ために挑んだはずの高橋選手の挑戦を、今シーズンは見詰めてみたい。[セリエA1女子開幕：2005年10月9日]

●今日のビタミンP：「われわれは、望もうと望むまいと、すべてが疑問に包まれているときに決断しなければならぬ」（ウォルター・リップマン＝米・政治評論家）



家の庭に一輪のサルスベリの花が咲いた。「父さんが、昔、切ってしまったのが、まだ生きてたのね」と母。紫の、というか瑠璃色のきれいな花が小さな車輪のように丸くなって咲いている。

天竜川に沿ったこの地域では、どの家にも、といったら大げさだが、3軒に1軒くらいの感じで、庭先にサルスベリが植えられていて、夏の道を車で走っていると、ああここは白、ここはピンクと白、あの赤とピククの組み合わせもきれいだなど、次々と現れてくる色彩に飽きることがない。

だから、今日、久しぶりに乗った山手線で、雨の中に咲く1本のピンクのサルスベリの木を見つけたときはうれしかった。確か、五反田から目黒に向かう右側の車窓から見える丘の上。住宅地の一角に咲いていた。大事に育てられたのだろう。随分大きな木になっていた。

木や花を見るたびに、そこにはどんな思いや記憶が込められているのだろう・・・と、思うようになったのは、ある小品を読んでからだ。それは、こんな物語だった。

ある主人公が、3月20日の彼岸の日が来るたびに、父が必ず菜の花を摘んできて、仏壇に供えて手を合わせる姿を見ていた。そして、数十年後。病床の父を見舞って帰ろうとする主人公は、父の小さな言葉を聞く。「もし忘れていなければ、毎年彼岸の日に、菜の花を供えてほしい。わたしのおふくろの命日だから」。その父が7歳で母を亡くし、貧しい家の、供花一つない寂しい葬列の中で、とっさに道端に咲いていた黄色い菜の花を両手で摘んで棺を覆った、ということを知ったのは、父が逝ってからだった。

その父が逝った翌年、主人公は春の彼岸の日に買い求めた菜の花を供え、父との約束を無事果たしたことに安心する。そして、秋になってから、自宅の近くを流れる小川の堤防に、こっそりと菜の花の種を蒔いた。

一見、雑草かと思まごう花も雑木林と化してしまった木々も、無造作に手折ってはいけない、と教えられた1文だった。

●今日のビタミンP：「一つの人生が他の人生より良いということはありません。それは、ただ別の人生だというだけなのです」（開高健）

人に会うたびに、自分の無知を教えられて恥ずかしくなる。でも、人に会うのは楽しい。与えられるばかりで、何も与えるものがないのが心苦しいけれど。

先日訪れた青森では、高木恭造という方言詩人の存在を教えられた。もう亡くなられているが、津軽方言で詩と小説を書いた方だ。

たまたまお会いしたのが、その高木恭造の甥に当たる高木保さんという方だったこともあり、興味を持って、詩集『まるめろ』をアマゾンで取り寄せた。その一編に、有名な

『りんごの花の下の指切  
彼女ア先ネ死ンでまたオンナア』

がある。

リンゴの花が咲く下で指切した恋人が、先に死んでしまった、という2行だけの詩。初めて知ったのだが、海外にも紹介されているのだという。

青森への旅は2日間だけだったが、これ以外にも、たくさんのことを教えられた。劇団『雪の会』の存在と菊谷栄という劇作家の存在もそうだ。

劇団『雪の会』は、東京に出ていた青森出身の学生たちが永六輔と語らって作った劇団で、今年が創立50年。地方劇団としては信じられない息の長い活動を続けてきた。当時、日大芸術学部の学生をしながら三木鶏郎の『冗談工房』で働いていた高木保さんも創立メンバーの一人で、現在は代表を務めている。

その高木さんの話によると、地域語である津軽弁を取り入れ、一貫してオリジナル作品を手がけてきたのだという。その中から伊奈かっぺいといったスターも生まれた。伊奈かっぺいは、現在も青森放送に勤めるサラリーマンだが、歌手、俳優、作曲家、詩人、イラストレーター、エッセイストと、幅広く活躍している。劇団『雪の会』の運営にも、3人の青森放送社員が深くかかわってきたようで、青森放送という企業には、そういった度量の深さがあるようだ。

昭和の喜劇王・エノケン（榎本健一）の黄金時代を陰で支えた喜劇作家・菊谷栄も、恥ずかしながら、初めて耳にする名前だった。ところが、この菊谷栄という人物は、三谷幸喜の台本で、別所広司とSMAPの稲垣吾郎が主演して公開された映画『笑いの大学』の主人公だった。有名な菊田一夫と並んで”二菊”と称された天才作家だった。高木さんは、そんなことも知らないのか、と思われたことだろう。

菊谷が召集令状を受けて出兵する日、新宿で公演中だったエノケンが、「1時間半だけ暇をください」と観客に訴え、公演を中断して品川駅に駆けつけたというエピソードは、あまりに有名なのだそうだ。そして、戦後20年たったある日、青森にある菊谷の墓前にエノケンの涙に濡れた姿があったということも。菊谷は出征から2ヵ月後の1937年11月、送り込まれていた中国戦線で35歳の生涯を閉じていた。

[『まるめろ—高木恭造全方言詩集』／津軽書房／2,100円] [『エノケンを支えた昭和モダニズム—菊谷栄』／北の街社／2,038円]

●今日のビタミンP：「毎日少しでも進歩して、少しでも多くの人に会い、たくさん与え、たくさん受け取りたいのです」（ジュリエット・グレコ＝シャンソン歌手／フランス）

明日、知人のカメラマンがU S オープンの取材に出発する。成田に1泊して、朝早くの便に乗るのだと言って、成田に向かった。

もう何年もテニスの4大大会は見えていない。いや、何十年というべきか。確か、ボリス・ベッカーが彗星のように登場し、優勝をさらったウインブルドン以来だから、もう18年前ということになるのか。

現場は離れたが、テニスの周りに集う人々の魅力には抗しがたく、ほとんどがテレビを通してだが、テニスは見続けてきた。しかし、現場を離れてしまうと、いちばんいけないのは、生の選手たちの息遣いや飛び散る汗や、コートに降る注ぐ太陽や風を共有できなくなってしまうことだ。テレビで観る選手たちは、同じ現場を踏んだ戦友ではなく、どうしても他人なのだ。たぶん、これは、どのスポーツにも言えるのだろうけれど、現場で見詰め、あるいはカメラのファインダー越しに追いつけた時間を共有したという意識は、今の時代のことぼとしては似つかわしくないかもしれないが、共に戦ったという戦友意識を芽生えさせる。それは、国対国の対抗戦でより鮮明なものとなって記憶の中にすり込まれる。だから、今、いくらシャラポアが美しいテニス選手で、かつ強くても、かつて同じスタジアムの空気を吸ったエバートや、ボルグやマッケンローやグラフのようには、親しみを覚えることができない。

だから、久しぶりに顔を合わせたテニス界の先輩から、オースチンやイエガーが、今も元気にしていると聞かされたときは、うれしかった。

残念なことに、今、トレーシー・オースチンやアンドレア・イエガーという名前を聞かされて、その顔を思い出せるテニスファンがどれだけいるだろう？ 15歳で世界のトップ10入りを果たし、16歳と18歳でU S オープンに優勝したオースチンと、14歳でプロに転向し、17歳でフレンチオープン準優勝、18歳でウインブルドン準優勝のイエガーは、共にバーンナウト（燃え尽き症候群）の代名詞のように言われ、傷ついて、プロ生活から足を洗った。若くして成功したものの精神のバランスを崩した、早すぎるプロ活動の悪弊の象徴だと言われながら、テニスシーンから姿を消した。

そのオースチンが42歳となった現在、米・カリフォルニアでリハビリテーション病院の理事として活躍。40歳になったイエガーは、ロッキー山脈の山麓に広大な敷地を持ったホスピスを自力で建て、終末医療に取り組んでいるという。

戦友だと思っているのは、こちらだけだろうが、とてもうれしいニュースだった。

●今日のビタミンP：「私はたとえ、そうするチャンスがあるとしても、人生を何ら変えたいとは思いません

ん。それが、私の求めている人生なのだから」（マーガレット・バーグ・ホワイト＝『ライフ』

創刊号の巻頭

を飾った女性カメラマン。晩年はパーキンソン病を患い、カメラをひもで手に縛り付けて撮影しながら、20年

の闘病生活を送った)



## 011 「黄金むらさき」って知ってますか？

---

別にブームに乗ったわけではないが、3年前から紫イモを作っている。それが、どうやら、今年是不作になりそうだ。つるが伸びず、紫イモを差した畑だけがはげ山のように土がむき出しになっている。

こうなってしまった要因はたくさんある。その第一番は、春先の寒さだろう。苗の伸びが例年より1週間は遅かった。それに、私の帰郷スケジュールがうまく調整できず、植え付けの時期が、もう1週間遅れてしまった。

植え付けが終わったあと、今度は空梅雨で雨がまったく降らなかった。そのため、根が伸びない。そこに、夏の暑さがやってきたため、つるは伸びず、葉も茂らない。これだけ、雨が降らないとわかっていたら、スプリンクラーで水を噴霧するべきだったが、もう降るだろう、もう降るだろうと思っている間に秋が来てしまった。

それでも、白イモのシモン1号と紅アズマは無事つるも伸びたのが、せめてもの救い。今年は、これらで我慢するしかない。

ところで、紫イモといっても、たくさんの種類があって、色も味もさまざまだ。すべてを食したわけではないので、絶対にとは言わないが、お薦めは？と問われたら、躊躇なく”黄金紫”と答えるだろう。種子島ゴールドと言われているものと同じなのではないかと思うのだが、紫イモの中でいちばん上品な甘さがあり、これを食べるようになって、もうお菓子はいらないと思うようになった。一般的に紫イモは果肉が紫で表皮は紫か赤だが、この黄金紫は果肉が紫で表皮は白。蒸してから焼き上げると、ほどよい水分を含んだほくほく感がたまらない。綾紫や山川紫のように濃い紫ではなく、白を含んだ薄い紫で、爽やか感があるのもいい。

その黄金紫が全滅。スプリンクラーを止めて、上京した。

●今日のビタミンP：「人生においては、起こるべきことが起こるのだから、実際に起こらなかったことを、あれこれ悩んだりしないのだ」（アラン・プロスト／元F1ドライバー）

## 012 昭和30年代の銀座を訪ねて

昨日とは打って変わって猛暑となった今日の午後、新橋から銀座8丁目界限を探索した。

昭和30年代の銀座を舞台としたノンフィクションノベルの企画が進んでいて、著者のIさんと連れだつての銀座行。当時は省線と言っていたという山手線の新橋駅を下りて、外堀通りを南下。銀座通りに出て、目指したのは、その銀座通りの資生堂パーラー銀座ショップの向かい辺りと、もう1本南に下がった信楽（しがらき）通り。そして、1本北側の金春（こんぱる）通り。

Iさんが大学生だった昭和34、35年ころ、その辺りにあったというビルを訪ねたのだが、人間の記憶ほどあいまいものはない。「ここだ、ここだ。40年たっても、やっぱり覚えているものだねえ」と喜ぶIさんの声に励まされて、パチリ、パチリとカメラのシャッターを切った私だったが、ビル解体中の作業員に話を聞くと、どうもそんな名前ではなかったらしい。

それで、当時から、この場所で営業しているお店を訪ねて、確認しようということになり、1軒の料理店に入った。ランチタイムのオーダーはストップしていて食事は食べられなかったが、銀座に店を開いて70余年になるというご主人が、最初は警戒しつつも、徐々に胸襟を開いて、当時の8丁目界限の雰囲気語ってくださったのだが、それによると、目指すビルは、私たちが探り当てたと思っていたビルの一つ隣の、今は更地になっている所だった。

あとで知ったのだが、突然飛び込んだそのお店『鳴門』は、銀座では数少ない高級ふぐ料理店として、知る人ぞ知るお店。昭和2年生まれで、今日（9月1日）が78歳の誕生日だというご主人の矢向繁雄さんと向かい合ってお話ししながら、私は不思議な思いにかられた。これをデジャヴエ（擬視感）というのだろうか。銀座に来ているはずなのに、まるで自分の田舎の、母の実家がある、そのまた田舎のおじいちゃん達と語り合っているかのような懐かしさに包まれている感覚。銀座には、探したら、こうしたよき東京が、きっとまだまだ生き残っているのに違いない。

「今度は、ランチを食べながら、お話を伺いたいね」と話しながら帰ってきた。

[鳴門：中央区銀座8-10-16]

●今日のビタミンP：「誰かの懐に深く入り込もうとすれば、自分をまず信じることさ」（ビリー・ソル・エステル）

## 013 総選挙を前に思うこと

---

近くの沢から引いている水道が止まってしまった。蛇口から、まったく水が出ない。まだ、見についていないので、はつきりはしないが、多分、台風14号の雨で、沢が土砂で埋まったか・・・、あるいは、貯水口に小石が詰まってしまったにちがいない。

畑のスプリンクラー用の水はいらなくなったので、そんなに苦ではないのだが、ハウスの中の植物にやる水はどうしても必要なもので、早く何とかしなくてはならない。市の水道水のほうを使えばいいのにとすると、「浜松市と合併としてから、水道料がぐっと上がってしまって、使う気になれない」と母。

3市8町1村が7月1日づけで合併した浜松市だが、都市部は別として山村部にはあまりいいことはなさそうだ。農協（JA）の合併のときもそうだったが、きめ細かかった情報誌は、広域をカバーするから当然とはいえ、大雑把になり、支所の数は減らなかったが、それぞれが金融部門、農業部門、●●部門と機能分担してしまったために、お金を下ろすのはA、肥料を買うのはBというように訪ね歩くことになってしまって、足の弱った母を嘆かせている。

同じように考えると、「郵政の民営化も、同じなんだろうねえ」と言うのが、目下の母の関心事であるらしい。しきりにテレビを見ては、言っている。

私自身は、田舎の郵便局にはほとんど行かないし、行ったとしても、局舎の前のポストに車を止めて投函するくらいだから、内部の様子はうかがい知れないが、東京では時々、速達を出すために訪ねるたびに、イライラさせられている。時々、待ち時間が馬鹿らしくなって、出てきてしまうこともあるほどだ。

だからといって、小泉郵政改革に賛成なわけではない。投票はたぶん、民主党の候補者に入れる。衆議院議員選挙は、総選挙なのであって、1つの案件に対する国民投票ではないと言う、たまたま、私のいる区の民主党候補者の言葉に納得したからだ。郵便局は民営化して、普通のサラリーマンのように、当たり前サービス精神と効率性を意識して仕事に取り組んでもらいたい。それは切に思う。けれど、それだけが総選挙の題目であってはならないと思う。これからの4年間で何をするのか？ と考えたとき、とりあえず、その候補者は信用がおける。今の私の選択基準は、それしかない。

●今日のビタミンP：「貧乏であれ、豊かになれば必ず志を失う」（道元禅師）

## 014 図書館で考えたこと

---

昭和30年代の銀座と四谷を調べるために図書館通いが続いている。本は基本的に、お金を出して買って読むことを自分自身に課してきたので、図書館というところに出向いたのは、本当に何十年ぶりになるのか、ちょっと思い出せない。

図書館というと、よく言われる”ベストセラー本の無料貸本屋”という思いこみが強く、だから書店で本が売れないし、著者の印税額を落とし、それがひいては、時間をじっくりとかけた著作を少なくしている。そういう目で見えてきた。だから、図書館というのは敵、という意識があり、緊張感を持って入口を入ったが、館員は思っていた以上に親切丁寧に、こちらの相談に対応してくれた。

しかし、目的の資料は中央図書館では見つからず、銀座のものは京橋図書館の郷土資料館で、四谷のものは新宿区立歴史博物館で探し出し、コピーすることができた。このコピーというやつ、1枚10円で何枚でもできるため、とても購入できない高価なものや、古い資料を入手したいと思っている者にとっては、とてもありがたい。ただ、現在市販しており、書店で購入できるものであったら、やはり、自分としては購入して、それからコピーなりしたいものだった。

友人の中にも、本は図書館で借りて読むを信条としていて、こちらが新刊書を買うたびに、「なぜ、そんな無駄なことを」と言われるのだが、それでも、自分はまだ売っているのである限り、欲しいと思った本は、お金を出して買って読みたいと思う。

図書館に公共性があるとすれば、なかなか手に入らない本が、そこに行けばある、ということではないのか？ なぜ、多くの人たちにベストセラーたらんと営々と努力し、心血を注いだ本を書き上げた人に、なんらの対価を払うことなく、無料で読ませる・・・ということ、図書館が積極的にしているのか、理解できない。

●今日のビタミンP：「ジャグラーが美しいのは、”美しくなろう”とする意志が美しいのであり、ジャグラーが粹なのは、”粹であろう”とする意志が粹なのである」（徳大寺有恒／自動車評論家）

今日も関東地方で大きな地震。震度5。震源地は茨城方面のようだが、東京も随分揺れた。書店を覗くと、●●危機管理マップとか、●●震災サバイバル・マニュアルといったタイトルが並んでいるが、それもよく分かるというか、さもありなんとといった感じだ。パキスタン・カシミールの映像を見るにつけ、都心に直下型が来たら、どんな状況に至るのか？ と不安はぬぐえない。毎週末、東京を離れるのも、できるだけ東京にいる時間を少なくしたいという気持ちが、どこかにあるということを否定できない。

その2時間弱の新幹線での時間を利用して、『9・11生死を分けた102分』を一気呵成に読み切った。

2001・9・11は誰にとっても、忘れることができない出来事だったのでないだろうか。私は、あるエアロビクス指導者の撮影の帰り、湘南から東京に向かう車の中でカーナビ兼用の車載テレビでビル倒壊を見た。誰かが「アメリカが攻撃されている」と言ったのを鮮明に覚えている。

書評では、外国人のカタカナ名が次々に出てきて、誰が誰だかわからなくなる、もっと読みやすい訳にしてほしかった・・・など、悪評もあったのだが、私は一気に読み終えた。没入したとっていい。こうしたテーマに感動したと言ったら、ひんしゆくを買うかもしれないのだが、どんどん引き込まれ、読み切れなかった分は、家に帰ってから、朝方までベッドの中で読み終え、気がついたら、外は白々と明けていた。

ニューヨーク・ワールドトレードセンターの北タワーに同時多発テロの1機目が激突してからタワーが持ちこたえられず倒壊するまでの102分の間に、ビルに閉じこめられた人々は、いかに考え、いかに行動したか？ ニューヨーク・タイムスの2人の記者が、126人の犠牲者を含む352人への3年をかけた取材で得た証言をもとに構成したものだ。

大作というだけでない、感動を与えるのは、352人の人生が圧縮されて、そこに再現されているからだ。激突の10分後には90数階から1階フロアまで降りたにもかかわらず、『安全』というアナウンスで戻ってしまった人がおり、警官が走り降りる姿を見ながらも、80数階まで重い装備を抱えて、倒壊のそのときまで登り続けた消防士がいた。激突の階より上にいながら、唯一残されていた階段をこじ開けて、地上にたどり着いた者がいるいっぽう、最後まで車いすの知人につきそってビルに残った者がいた。

どういう決断と行動が人の命を救い、また失わせるのか・・・サバイバルの書としても読めるのだが、人間が捨てたものではないと思わせる極限での生きざまを教えてくれる書でもある。

[『9・11生死を分けた102分』（文藝春秋／1,890円）]

●今日のビタミンP：「解決しなければならない問題がある。だから、自分は解決策を探すんだ」（コーリン・チャプマン／元ロータス監督、オーナー）



## 016 脳は変わってきたのか？

もう2005年もわずかになってしまった。来年日本で開催されるバレーボールの世界選手権に向けての小冊子作りに時間が取られ、なかなか本来の企画が進まない日々に苛立ちながら、ここまで来てしまった。

今日は久しぶりに、著作を進めていただいているIさんに会いに東中野に出る。近況報告を聞きながら、心落ち着く時間を持つことができた。

そのIさんが某局の元会長宅に取材があるということで、その終了を待つ喫茶店で時間をつぶしている間、大きな薄型テレビからは、耐震偽造の証人喚問がずっと映されていた。一様に人間らしい怯えや恥じ入る気持が伝わってこない映像を気にしながら、読みかけの1冊を3分の2ほど読み進む。

人を傷つけたり、独裁者になったり、愛したりする“危険な”脳はどうして作られるかについて書かれた吉成真由美氏の『危険な脳はこうして作られる』。テレビに映される顔にも、その危険な脳が隠されているように思わざるをえなかった。

小学生が誘拐されたり、殺されたりといった殺伐とした事件が続くが、そのたびに、両親の育て方や学校や社会の対応の仕方が問題とされる。だが、そこに脳の病気という視点が欠けているという指摘にうなづくことが多かった。

吉成氏の指摘によると、その脳の病気、スキゾフレニアは、どこの国でも人口のおよそ1%が患っていると言われ、その計算でいくと日本でも少なくとも100万人にのぼる患者がいることになるということだ。現実社会での人間関係というものの把握がうまくできなくなって、引き籠もってしまったり、情報を統合して思考することができず、行動が非常識で非論理的、せつな的なってしまう人や、動物を虐待してしまう少年少女の50%近くが、両親にスキゾフレニア患者を持っている、ということである。それを病気として捕らえて治療していかないと現代の不可解な事件の真実は捉えられないのかもしれない。と、MIT（マサチューセッツ工科大学）の脳および認知科学学部を卒業し、ハーバード大学大学院で脳科学を専攻した元NHKディレクターだった吉成氏は伝えたかったのか？

喫茶店には、仕事の途中らしいサラリーマンの2人連れが立ち代り入れ替わりしていった。「かわいそうだよな。あんな年寄りをいじめなくたって・・・」「あんなこと責められたら、俺たちの仕事だって、やってられないよな」「本当に調べて、全国の半分が強度不足ってわかったら、全部補償できるのか」「個人住宅で不良住宅買わされたって、自己責任じゃないかよ。自己責任だろ」「責めてるほうだって、結構悪いことやって、あそこまでなったんじゃないの」

耳に残って、今も思い出せる言葉を並べてみる。

それで、先の吉成氏の著作に戻るのだが、あとがきに書かれていた、こんな言葉に惹かれて、この本を手にとったのである。

人々は往々にして理不尽で非論理的で自己中心的なものです。

それでも許してあげなさい。

あなたが親切にすれば、結局自分の得になるからやってるのさと噂するでしょう。

それでも親切にしてあげなさい。

成功すれば、偽りの友と本当の敵を作るでしょう。

それでも成功しなさい。

正直で率直なら、人はだまそうとするでしょう。

それでも正直で率直でいなさい。

何年もかかって築き上げたものを、一晩で壊されることもあるでしょう。

それでも築き上げなさい。

平静と幸せを見つければ、必ず嫉妬されるでしょう。

それでも幸せでいなさい。

あなたが良い事をして、人はすぐに忘れてしまうでしょう。

それでも良い事をしなさい。

力を尽くしても十分な結果は得られないかもしれない。

それでも力を尽くしなさい。

何故なら、最終的にはすべてあなた自身の問題であって、

けっしてあなたと他の人々の間の問題じゃないのだから。（マザー・テレサ）

・・・ユーモアもわからないような感じがする女性にのぼせあがっているのは火を見るより明らかで、そんな彼を見るのは悲しかった』

『パブリッシャー 出版に恋をした男』（晶文社）の中で、著者のトム・マシュラーは、ジョン・レノンについて、こう書いている。

ジョン・レノンのいたずら書きを『絵本ジョン・レノンセンス』として1冊の本にまとめ出版したいきさつについて述べた項の中でのことだ。

手掛けた著者のうち11人がノーベル文学賞を受賞した“カリスマ編集者”も、当時既に売れっ子だったジョン・レノンとの契約に当たっては、相当の金額を要求されるものと覚悟していたようだが、意外なことに前払い印税は1万ポンドだったということである。販売関係者の反応もいまいちで、予約はたったの2万部だったらしい。それが、大はずれで、発売後はじめての月曜日がくると、オフィスの倉庫の前には、追加注文の冊数を確保するために販売業者が列を作っていたということだ。イギリスでもアメリカでも40万部が売れるベストセラーとなった。

『悪魔の詩』でイスラム教の指導者から死刑の法的決定を受けたサルマン・ラシュディが、身の危険を感じて地下に潜ったときも、電話連絡を切らさず自宅に食事に招待したことなど、著者が現役時代に出版の現場でめぐり合った150人を超す作家やアーティストの姿を通して、編集者のあり方を教えられた。

・・・出来た政府があんなもんじゃひどいと思ってたんでしょね』

本名を出淵次郎吉（いずぶち・じろきち）といった初代・三遊亭円朝の作品世界を訪ね、一冊の本とした『円朝ざんまい』（平凡社）の中で、著者・森まゆみは自らをして語らせている。

噺家、落語家に興味を持ってではなく、江戸から明治にかけての時代変化の中で生きた人物のことが知れるかと手にした本だったが、350ページあまりを一気に読み終えた。

知りたいと思っていたことも2行ばかり見つけた。

「鯉沢（かじかざわ）の夜噺」が、山々亭有人こと篠野採菊（じょうの・さいぎく）、瀬川如臯（せがわ・じょこう）、仮名垣魯文（かながき・ろぶん）、河竹黙阿弥（かわたけ・もくあみ）こと河竹新七ら粋狂連の三題噺の会で作られたというところだ。

この粋狂連という連ともうひとつ興笑連という江戸末期の二つの連について知りたいと思っているのだが、これがなかなか苦戦している。ふたつの連とも、幕末の三題噺愛好文人たちによるものらしいのだが、粋狂連には上記3名のほかに、2代目柳亭左楽、初代三遊亭円朝、絵師の一恵斎芳幾、文人墨客の梅素玄魚らの名前がある。

この最後の梅素玄魚は、江戸末期から明治にかけて活躍した意匠家、今でいえば、イラストも描くデザイナーで、版下書きをしたり、幟（のぼり）に篆書（てんしょ）で字を書いたりしていた人物だ。

いまや人気職業のひとつとなっているデザイナーやコピーライターの草分け的な存在として、なんとかその人物像がつかめないかと思っている。

・・・東京オリンピックが開催された昭和39（1964）年開業の新幹線「こだま」の速度と同じだった。（中略）戦後高度成長の象徴であった夢の新幹線も合理的な集合住宅もアジア初の水洗便所も、すべて満州ですでに実験済みだった』

戦後日本の高度成長のグランドデザインを幻の傀儡国家・満州国建国に殉じ、群がった政治家や経済人、軍人の夢や生きざまに置き、それらを通して“第2のアヘン戦争”と著者のいう日中戦争の舞台裏を描いた『阿片王 満州の夜と霧』（新潮社）の中で、佐野眞一は書いている。

著者は、数十万人の中国人をアヘンで廃人にしながら、極東軍事裁判で無罪となった里見甫（さとみ・はじめ）という男の生涯をたどることで何を伝えたかったのか？

満州国という建国後わずか13年で地上から姿を消した人工国家に関わり、敗戦後は戦犯を逃れて、戦後日本の政治経済の地下でつながっていた人々を糾弾したかったのか？

100人を超す生存者を探し出し、訪ね歩いた中で、紡ぎ出された世界には、現在の日本と地下水脈でつながった戦前の日本の姿が描かれて、暗澹たる気持にさせられた。

## 19 『嗚呼、もし——と考えずにはいられない・・・

スターリンの父親が息子をあれ程ひどく虐待しなければ、おそらく二千万人もの人々は殺されずに済んだのである』

600万人のユダヤ人殺害を強行したヒトラー、その数倍にもものぼる2000万人以上（推定）を殺害したとされるスターリン、そして、毛沢東、金日成、ポル・ポト、フランコ、ミロソビッチ、フセインなど、君主制にも増して不条理で不自由な独裁体制を敷いた独裁者を誰が生んだか？

元NHKディレクターでノーベル賞学者である利根川進夫人である吉成真由美がNHKテレビにインタビュアーとして出ているのも見たのに刺激されて、正月休みに氏の著作『危険な脳はこうして作られる』（新潮選書）を読み返した。

人間の脳がどうかしてしてしまったのだろうか？ 2007年が明けても、ニュースにはろくな事が報じられない。“まじめで大人しく、礼儀正しい”普通の兄が妹を殺して切り刻む。そして繰り返される同じ嘆き・・・。

「なぜこの子だけが突然変わってしまったのか、まったく理解に苦しむ」

そのあとには、決まって両親の育て方やしつけ、学校や先生、社会の対応が問題と指摘される。

吉成氏はその著書の中で、酒鬼薔薇事件以来の非論理的な殺人について、脳の不調による殺人として、脳の病気の観点から取り組まないと、これはどうしようもないと指摘している。

特にかつて精神分裂病と言われたスキゾフレニア患者が日本でも少なく見積もっても100万人にのぼっており、その患者の50%近くが両親に同じ患者を持っているという指摘には考えさせられた。人間は皆平等に正常であり、親のしつけや先生の教育がよければ、よい子に育つもの



なのだろうか？

・・・を追いかけるなかで、そのおぞましさに反して不思議なほど誠実さと人間味あふれる方たちにお目にかかれて嬉しかった』

戦前の大東亜戦争中の関東軍731部隊を率いた石井四郎の生涯を追った『731』（新潮社）の「あとがき」で著者・青木富美子は語っている。

この本を手にとったのは高田馬場の書店だったが、それは、著者の青木富美子という名前に惹かれてだった。

もう随分昔になるが、ベトナムで散ったカメラマン沢田教一を追った『ライカでグッドバイ』（文芸春秋）をむさぼり読んだ記憶がある。その著者が今はニューヨークに住み、フリーランスのジャーナリストとして活躍してきたことも、そのときに知った。

昨年秋にNHKが幾つかの『満蒙開拓団』の現実を探った番組をBSで放送しており、その中で、国民を守るはずの軍の高級将校と家族など軍属だけが、開拓団を置いてきぼりに我先にと逃げ帰った事実を伝えていたが、この中でも、同じような現実が触れられていて、興味をひかれた。

「私服とせよ」という命令を出して、関東軍は軍服を脱いで、私服で逃げるように指令を受けたことが指摘されている。

それはともかく、ペスト菌や炭素菌の情報をマッカーサーに売り渡すことで誰ひとりとして戦犯に問われなかった731部隊の生き残り軍医たちがその後、エイズ過を引き起こすミドリ十字の中でどのように生きたのか？ その後について、もう少し詳細に伝えてもらいたかった、というのが読後感である。

## 021 『おかしいじゃないか！』

---

特別な人間が大金を払えば受けられる治療があって、それを受けたら治る、なんてさ』

『百万回の永訣』（中央公論新社）の中で、著者の柳原和子さんが引用した言葉・・・。

医療も、今のように経済効率を追及していったら、こういうことも現実になるのだろう。というか、すでに、それは現実なのだろう。王監督の奇跡的な回復手術も、だれにでも受けられるものではないらしいのだから。

それにしても、どうしてこの本を手にとったのか？ どの書評なり、広告なりで購入したのか、自分でもわからないのだが、読み始めると一気に読み終えてしまった。

ガンの再発で“余命半年”を告げられてからの生への戦い。生身の人間の病気に立ち向かう気持ちがきりきりと浸みてくる。

特に無神経きわまりない告知の現場があることを、知人の告知経験を聞いて知っただけに、これだけの人でも、同じように扱われた現実を知らされて怒りさえ覚えた。

自分だったら、とてもこれまで戦えないだろうが、勇気を与えられる本だった。

「医療の予測を超えてがんを克服した人の多くに共通するのは、医師がいかに最悪の告知をしたとしても、本人か家族の誰かが死なない、と直感していることだ」

柳原さんが言いたいことは、これだったに違いない。

その政治的野望のもとに大衆をファシズムの嵐にまき込もうとしたならば、必ずや彼女のスタジオを訪問して、その運動への参加協力を懇願したであろう」と、五木寛之が『E I K O b y E I K O』の中で書いた石岡暎子の『私デザイン』を、やっと読み終えた。

総ページ数が476ページにのぼる分厚い本だが、どのページにも彼女の制作への志が詰まっ  
ていて、十分に読み応えがあった。

映画『M I S H I M A』の美術監督としてのプロダクションデザインの制作から始まって、ソ  
ルトレイク冬季五輪時のデサントのレーシングウェアデザインまで、石岡暎子がデザインという  
仕事とどう格闘してきたか？ どうオリジナリティを実現させてきたか？

教えられると同時に勇気づけられもした。

マイルス・デイビスのジャケットデザインの最終決定に当たって、「貴方が私からのベストワー  
クを期待するなら、私が一番自信のある案を実行することがベストです」と言い切るところは圧  
巻だ。「マイルスは自分の音楽にいろいろ注文をつけられて、その通りにやりますか？」と言っ  
てしまうのである。

## 023 「肉を食べるときは、気合いを入れて食べる。」

---

なぜなら、相手は生命を投げ出しているのだから」

東京にいた頃、友人に誘われて肉料理を食べるときはいつも、どこかで読んだかしたそんなことばを噛み締めて、背筋を伸ばし、はしを持ったものだ。

しかし、田舎にこもってからというもの、とんと肉というものを食べなくなってしまった。別にベジタリアンになったというわけではない。ただ、東京では、月末には自身へのご褒美の意味で、奮発した焼き肉も、今は食べたいと思わない。そういえば、渋谷でよく行ったしゃぶしゃぶも、大久保のコリア街で食べたぷるこぎもうまかったなあ。と、思い出したりはするのだが。

「肉を食べるときは、気合いを入れて食べる」

内澤句子著『世界屠畜紀行』を読みながらも、この言葉は何度も何度も噛み締めた。

世界の屠殺現場をイラストルポしたこの本が、ドキュメンタリー部門の書店ランキングで上位を占めている時期があって、思わずアマゾンで買ってしまったのだ。とても面白い1冊だった。

私たちは常日頃、レストランではきれいに調理された肉を食べる。スーパーにはスライスされラッピングされた肉が並んでいる。

しかし、最初からきれいに切り分けられた肉が存在するわけではない。そこに至るまでには、様々な屠殺の行程が存在するわけで、内澤氏は、日本だけでなく、韓国、バリ島、エジプト、チェコ、モンゴル、インド、アメリカ等々の屠殺場を訪ねて、動物が肉として我々の目の前に並ぶまでの行程とそこに働く人々を取材している。

核家族化の下で、人の死というものが身近なものでなくなったのと同様に、食肉加工工程の近代化の中で、いつのまにか我々は、我々の犠牲となっている動物の死というものも意識しないで暮らしている。

何かを食べるということは、必ず、他の生命を犠牲にしている。食べるという行為を通して、多くの生命を奪っている。そういう教育がもう少し成されていたら、現代の世相も、もう少しましなものになるのにな、と思わざるをえない。

★★★

“ご飯を食べる前に『いただきます』って言うでしょ。あれはつまり、『命をいただく』という意味なんですね。だから肉の隅々までムダにしないできれいに食べる。結局、食を大切にすることとは、ことばで教えられることじゃなく、ふだんの生活すべてに埋め込まれていることなんです”（『世界屠畜紀行』の中に引用されている小長谷有紀・国立民俗学博物館教授のことば）



## 024 「いずこへ去りしか、まぼろしの光？」

いずこにありや、栄光と夢？」

『栄光と夢』の著者ウィリアム・マンチェスターは、その本の冒頭に、このワーズワースの詩の2行を引用している。それが、まるで、今のアメリカへの問いかけのように思えて、5巻本を読み進めた。

1932年というから、日本では昭和7年から1972年、昭和47年までの40年間のアメリカの現代史を、政治経済の視点からだけでなく、ラジオやテレビといった大衆娯楽や科学、ファッション、セックスまで、社会風俗の変化を織り交ぜて描いた大作だ。

あまりにも長過ぎて、覚えている事は少ないのだが、いくつかはノートに書き写しておいた。

●1932年秋、19歳のリチャード・ニクソンはホイットィアー・カレッジの新入生として歴史を専攻し、家族の経営するニクソンズ・マーケットの生鮮野菜のカウンターを切り盛りしていた。毎朝、夜明け前に、ロサンゼルス公共市場へ仕入れに出かけ、生産者と値段の駆け引きをした。

●1938年、ホテルの部屋でラジオを聴いていたハリー・ジェームスの妻が、「あなた、この子の歌をお聴きなさいな」と言うと、

ハリーは、ニュージャージーのエングルウッドに車を飛ばし、ラスティック・キャビンというドライブインでシナトラを探し出し、すぐに契約した。

●「われわれは一身をあげて憎悪しなければならない。戦闘を渴望しなければならない。われわれの人生の目標は、殺すことでなければならないのだ」（太平洋戦争中の米海軍レスリー・J・マクネアー中将）

●ウィリアム・J・レヴィットが、ロングアイランドのナツソー郡にある馬鈴薯畑1500エーカーを買い取り、1949年、風の強くて肌寒い3月7日の朝——彼が小さな事務所で分譲の受付を始めたとき、すでに100組以上の夫婦が行列していた。中にはコーヒーとドーナツを持参して4昼夜もそこで待っていたものもいた。（こうして郊外住宅の時代が幕を開けた）

●ある婦人「ええ、家の主人が前よりもずっと良い仕事について、たくさんかせぐようになったんですのよ。この戦争がいつまでも続けばいいと思いますわ」

これを聞いていた別の婦人が立ち上がると、その女性の顔をぴしゃりとやって、言った。

「これは真珠湾で死んだ私の息子のかわりよ」

そして、2度目の平手打ち、

「これは、パターンで死んだ子のためだわ」

●赤狩りのマッカーシー旋風が吹き荒れていた1954年のアメリカ上院で、マッカーシーの常設小委員会の支出に対する評決が行われたとき、ケネディも、ジョンソンも、ハンフリーも、マンスフィールドも、後難を恐れて賛成に回ったとき、勇気を持って反対票を投じたのは、アーカンソーのフルブライトただ一人だった。

そして、それから1年後の同じ議場で、上院総会は、マッカーシーの譴責勧告を承認するのだが、その票数は賛成67票、反対22票だった。

●1954年、この年までに、家事を手伝うアメリの夫は、全体の3分の2になっていた。そこに住む若い父親は、皿洗いや料理や赤ん坊のおむつを熱心に取り替えた。つまり、「若い妻は、夫をパートタイムの召使いか最新の家庭器具のように扱いはじめた」

●アメリカで最初の商業用コンピューターを作ったジョン・モーチリーは、「この機械を有効に使えるのは、4社か5社の巨大企業だけだろう」と予言したが、1967年、エーリック・フロムは警告した。「妖怪がわれわれの中をさまよっている……それは、コンピューターに動かされる……完全に機械化された社会という新しい妖怪である」

人々に、その欲するところではなく、  
欲すべきであったと、後に気づくところのものを  
与えることにある」

エアフォース・ワン（アメリカ大統領専用機）に唯一、置かれている政治雑誌といわれる『ニューリパブリック』の創刊に立ち会い、ウッドロー・ウィルソン大統領のアドバイザーを務めたあと、戦後はマッカーシズムとベトナム戦争に疑問を投げかけ、ジョンソン大統領と激しく論争を展開したジャーナリスト、ウォルター・リップマンのことば。（『現代史の目撃者 リップマンとアメリカの世紀』〔TBSブリタニカ〕より）

ニュースでは23日の自民党総裁選に向けて、街頭演説に立つ麻生幹事長と福田元官房長官の姿が伝えられているが、両人とも参院選の敗北からか、“人々が欲するところ”にべったりと寄り添うふりが目立ち、“欲すべきであったと、あとで気づくところのもの”のことなど、おくびにも出さない決意のようだ。

両人はそれでも、政権奪取という目標のためだからしかたがないとしよう。しかし、一夜で雪崩を打ったように福田支持に走った自民党議員という人種には、節操というものが無いのだろうか？ 理念というものが無いのだろうか？

どちらが有利で、どちらが勝つか？ どちらについたら選挙に有利で、役職がもらえるか？ そんなことにしか頭が回っていない。特に“小泉チルドレン”と呼ばれる人々の狼狽ぶりは、見ているこちらが恥ずかしくなるほどだ。政治家として何かを成したいのではなく、ただ政治家でいたいだけ、としか見えない慌てぶりだ。

小泉さんは、自民党をぶっ壊す！ と言っていたが、残念ながら、それは完全な失敗だったのだと気づいたのだろうか？

ブレンダン・ギルは、その著『「ニュー Yorker」物語』（新潮社）の中で、創刊編集長だったハロルド・ロスの言葉を、そう紹介している。

雑誌『ニュー Yorker』の執筆陣の一人だったギルが、「Talk of the Town(町の話題)」にズームランという人気玩具を取り上げたとき、どうしても言葉で説明するのが難しく「表現できない」という文章を書くと、その一文を読んだロスが電話をかけてきて言ったという言葉である。

ハロルド・ロスという人物の存在を知ったのは確か、常磐新平の『アメリカの編集者たち』（集英社）でだった。

今でもよく覚えているのは、たぶん、自分自身がなかなか部数の伸びない雑誌を抱えていた時期だったからだろう。

ロスはその創刊趣意書の中で、「『ニュー Yorker』はダビュークの老婆のために編集する雑誌ではない。その老婆が何を考えているかということなど『ニュー Yorker』の関知しないところである」と宣言していたが、1925年の2月に1万5,000部でスタートした『ニュー Yorker』は、8月には2,700部まで部数が落ちてしまっていた。そんなとき、ニューヨークの六番街にあった社屋を訪ねてきた母親に、ロスは自分が編集する『ニュー Yorker』をどう思うか尋ねている。「ねえ、ハロルド、おまえもいつか『サタデイ・イヴニング・ポスト』と関係ができるといいねえ」

それが、それこそ、“ダビュークの老婆”のような母親の返事だった。

ベンジャミン・フランクリンが創刊し、当時売れっ子のフィッツジェラルドがいくつもの短編を書いていた『サタデイ・イヴニング・ポスト』は、原稿料も『ニュー Yorker』の10倍は出しており、アメリカ全土の人々が発売日を待ちこがれている雑誌だった。

おもしろいな、と思ったのは、その『サタデイ・イヴニング・ポスト』は1967年に廃刊になるのだが、『ニュー Yorker』は生き残って、1970年代、80年代には50万部近くを発行する雑誌として現在に至っているというところだ。

その『ニュー Yorker』も初代編集長のロスから2代目のウィリアム・ショーンのと、『ヴァニティ・フェア』の女性編集長だったティーナ・ブラウン、そして作家のデビット・レムニックへと代を重ね、誌面も変質を余儀なくされたのだろうか？

ロスとショーンと愉快的仲間たち、と副題を付けられた『「ニュー Yorker」物語』を読みながら、渋谷のNHKの近くにあった（今もあるだろうか？）放文社という書店で、毎号手に取るのを楽しみにしていた中とじの薄い雑誌を懐かしく思い出した。イラストの表紙が楽しみで、ずっと捨てずにいたのだが、東京を離れるときに粗大ゴミに混ぜて捨ててもらってしまったのだ。

思い知らされることがある。

自分の人生を充実してくれていた喜びや目に見えない贈り物は、すべて友人が与えてくれたものだったと」

『ABCDJ』（NHK出版）の中でアメリカの名コラムニスト、ボブ・グリーンは、そう語りながら、少年時代からの親友5人の物語を進めていく。描かれているのは、彼が故郷オハイオ州の幼稚園で出会った親友Jを中心とした50年余にわたる人生だ。

末期ガンを宣告されたJのために、残された時間をできるかぎり一緒に過ごそう。生まれ故郷に集まった50代後半の男たちは、Jがもう一度見てみたい、訪ねてみたいと言う故郷の町々を訪ね歩く。“アメリカの精神的故郷”とも言われる中西部の小さな町にかつてあったレストランを、母校の校庭を、キャンデーショップを、テーマパークを。そこは、いつもただらだと夜の時間を過ごし、意味のない話をいつまでも飽きることなく続けることのできた、5人にとっての思い出の場所だ。だが、オハイオからも、もう“古きよきアメリカ”は消えてしまっている。“進歩というものは、ほんとうに人間を幸せにしてきたのだろうか？”ボブはそう語り掛けたかったのだろう。

「それでもまだぼくらが二十代や三十代のときまでは、最後ののんびりした時代があったな。何もかも容赦なく、過剰に流れこんでくるまえのことだよ。あの頃はまだパソコンなんてものはなかったし、携帯電話もなかった。ワールド・ワイド・ウェブも存在していなかったし、電話もナンバー・ディスプレイも保留機能もなかった」

「まだ少年だった頃・・・私たちも世界そのものもメディアによるイメージの奔流にまだ晒されてなく、その影響力に左右されることはなかった頃・・・世界は二階にある部屋から見える景色よりも、決して大きくなることはなかったのだ。」

わからないものよ」

フエゴ島で出会ったミス・スターリングという7年間旅を続け、「来年の5月にはネパールのつつじを見に行く途中よ」と言う婦人の言葉を、ブルース・チャトウィンは書き留めている。48歳で夭逝する英国人作家は、このとき37歳。パタゴニアを半年かけて漂流している途中だった。

英国ホーソンデン賞を受賞した紀行文学の傑作という書評につられて手にしたブルース・チャトウィンの『パタゴニア』（めるくまーる）を、やっと読み終えた。

ほんと、やっとの思いで読み終えたというのが実感である。購入してから半年が経過してしまった。読んでは放り出し、それでもどこか気になっていて、また手にして、数ページ読んでは放り出しての、繰り返しだった。

気になったのは、チャトウィンが訪ねる一人ひとりが、パタゴニアという辺境の地で、それでも生きていて、運命に立ち向かっているからだった。

ある日突然「パタゴニアに出発した」との電報を勤めていた『サンデー・タイムズ』に送りつけて会社を辞め、半年間をかけて駆け巡ったパタゴニアの旅。そこで、彼が出会ったのは、地の果てに流れ着いたアウトローたちだった。幸福そうに見える者もいれば、そうでない者もいた。しかし、皆、一様に逃れられない運命ともいえるその土地での生活に立ち向かっていた。

パタゴニア皇太子を名乗る男、独立運動に敗れて逃げてきた男、アメリカを逃れたギャング、一角獣の骨を発掘したと語る神父、ロシア人亡命者やヨーロッパからの移民たち。

自分が生きる場所を探してパタゴニアまできてしまった人たちに、チャトウィンは、問いかける。

「なぜ、人は生まれた土地、幸せに包まれた土地を離れて、移動し続けるのか？」「なぜ、定住せず、もっとよい土地を求めて、漂流するのか？」

そして、

「求めていたものは手にできたのか？」

今日は死ぬ番であると、  
心に決めなさい」

藤沢周平の『盲目剣笈返し』（文春文庫『隠し剣秋風抄』所収）を読みながら、どこかに書き留めたはずだと思い、古い手帳を繰って、藤堂高虎のこの言葉を確認した。戦国時代から江戸時代にかけて活躍した武将で、伊予今治藩主、伊勢津藩主であった藤堂高虎は、何人も主君を変えた。そのことから、変節の人、不忠義の人と歴史書には描かれることが多いようだが、仕えた主君には実に忠実で、最後の主君・徳川家康からも信頼が厚く、外様では唯一、臨終の席に立ち会うことを許されている。

『盲目剣笈返し』は、映画になった『武士の一分』（山田洋次監督）の原作ということで手に取った。毒見役の主人公・新之丞が、毒に当たって失明し、藩への奉公がかなわなくなったにもかかわらず、禄をそのままにとめおく代償として妻に手をかけた島村という上司に果し合いを申し込み、それを果たすまでの物語である。

盲目になっても、意地と誇りは失わない。新之丞は、一刀流の剣士に立ち向かっていく。「勝つことがすべてではなかった。武士の一分が立てばそれでよい。敵はいずれ仕掛けてくるだろう。生死を問わず、そのときが勝負だった」

連日テレビや新聞で伝えられる防衛省前事務次官の贈賄事件や厚労省の薬害事件にかかわった役人だけでなく、船場吉兆や赤福といった老舗企業人の不祥事。意地と誇りはどこに行ってしまったのか。人はなぜここまで劣化してしまったのか。

何をしてましたか？』

と問われたら、たぶん、考え込んでしまうだろう。

年表を繰ってやっと、それが1968年で、昭和の年号でいうと昭和43年になるということがわかった、というのが実情である。それくらい、昔の出来事を、年齢なり、年代なりと照合して、正確に思い出すのは難しい。

近頃話題になっている社保庁の年金記録問題で、「年金特別便」というものが発送され始めたそうだが、それが不親切極まりない書面で、“宙に浮いた年金記録に紛れ込んでいる可能性があるから”と送られてくるにも関わらず、それがどれかは明記されず“自分で探して報告せよ”、というやり方で、特別便というやつが送られてきたわけではないが、周りには怒りをつのらせている人が多い。

テレビで、ある人が、欠けていたと思われる部分を指摘して持参したら、その会社はどこにあって、社長の名前は？ 上司や同僚で思い出せる名前は？ と質問され、頭を抱えるシーンが放映されていた。自分だって、卒業して最初に入った会社の社長を今は思い出せない。それくらい記憶というものはあいまいなものだ。社保庁も、調べて判明したから送るのだから「これこれという事実が出てきましたが、確認できますか？」というくらいの配慮があつてしかるべきではないのか、と、こちらまで憤ってしまう、このごろだ。

お役人のやることは、おしなべてそんなものなのだろうが、『二十歳のころ、何をしてただろうか？』ということに戻ると、

私は、二十歳の夏を、北海道で迎えた。

上野から夜行列車で青森に向かい、青函連絡船、そしてまだ煙を出して走っていた蒸気機関車を乗り継いで、帯広から単線の土幌線（今は廃線となっている）で終点の十勝三股まで行き、三股小学校の校庭でテントを張った翌日、大雪山系の縦走に出発した。初めて背負う30キロのキスリングが肩に食い込んだ記憶は鮮明にある。人の背丈よりも高い蕨（フキ）が道沿いに密生しており、「これなら傘になるよ」と、皆で言い合った。このときの山行をよく覚えているのは、この縦走の途中で、雪渓の水で頭を洗ったことがたたって、かぜをひき高熱を出して寝込んでしまったからだ。悪いことに、その夜は嵐になり、稜線を走る雷の光にびくびくしながら、テントの中で震えていた。翌朝、麓の富良野まで下ろされ、旭川の病院に入院した。それが、記憶に残る二十歳の出来事だ。

懲りないやつだったな、と思う。退院後、下山した仲間3人と、その足で利尻島に渡り、雨の中を利尻山頂まで登頂した。

残念ながら、そのほかのことは、二十歳の記憶としては思い出すことができない。

それで、いったい何を言いたかったのかというと、そうは言っても、多くの人は、「二十歳の



ころ？」と問われて、結構しっかりと思い出し、語れるものなんだと、感心したからである。

『これがいい！』と思った1時間後には、もうガーナ大使館の扉を叩いていましたね。そしてユネスコの試験を受けてガーナに行くことになった』（秋山仁／数学者）

『それから、もう1冊は、アンドレ・ジッドの『狭き門』です。僕が最初に読んだフランスの本で、この本で僕はキリスト教を恐ろしいものだ、と感じて、出来るだけキリスト教から離れていようと決めた』（大江健三郎／小説家）

『一人の人に恋をしてたんだけど、私は数少ない女子団員の一人として、男子団員全員に対して平等に愛を持たなくてはいけないと考えていたの。だから恋を伝えられなくて、最後にさよならのラブレターを出してけじめをつけたわけ。そして芝居を辞めたんです』（加藤登紀子／シンガーソングライター）

『その時はねえ、巨人の合宿やってたんだよ。合宿所というか、巨人寮という寮でね、三田四国町にあったんですよ。当時女優の高峰三枝子というのがいたんですけど、その家の斜め前でした。だから要領のいい奴は女優の家へ遊びにいったらご飯をご馳走になったりしとったんだけど、僕なんかは田舎者だからそういうのは恥ずかしくてさ、寮にばかりいた』（川上哲治／元巨人軍監督）

“有名無名・老若男女、68の青春群像”と銘打たれた『二十歳のころ』（立花隆＋東京大学教養学部立花隆ゼミ／新潮社）を、アマゾンの中古商品で買って、読み終えた。

### 031 『一体全体、自分たちを何様と』

---

心得ているのか。彼らの行動の自由にも限界があることを教えてやらねばならない。イスラエル軍と英仏連合軍が（スエズ）運河を占拠しようとする時点で、アイゼンハウアーは撤退を命じた。その命令がまちがいなく実行されるように、これら三国の最大の弱点をついた。撤退しないかぎり、アメリカの経済的、金融的支援は一切中止するとしたのである』

2007年に読んだ本の中で、いちばん記憶に残るのは何か、と自らに問うと、このウォルター・リップマンについて書いた『現代史の目撃者 リップマンとアメリカの世紀』（TBSブリタニカ）の中のロナルド・スティールの言葉に突き当たる。

1956年10月、スエズ運河の国有化を宣言したエジプトの指導者ナセルに激怒したイギリスとフランスはイスラエルと共同歩調をとって運河奪回作戦に出る。イスラエル軍のシナイ半島侵攻に呼応して英仏連合軍はスエズに上陸したのだが・・・、両国はそこで、アメリカの激しい反応にあって、度肝を抜かれるのである。

運河占拠を目前に、イギリスが白旗を掲げる。するとフランスには一人で立ち向かう力はなかった。勝利を目前にしていたイスラエルも進撃を中止。

こうして、英仏といえども、外交における自主性はワシントン（アメリカ）の許容範囲の問題であることが白日の下にさらされることになり、アメリカの世紀が始まる。かつての二大帝国は、いまやいかに斜陽化したかを劇的に知らしめられたのである。第2次世界大戦で疲弊し崩壊寸前のイギリス経済は、アメリカドルの支援を絶たれては立ち行かないところまで追い込まれており、大英帝国の栄光にしがみつくことを許さなかった。

それから半世紀がたった2007年・・・。世界を牛耳ってきたアメリカ経済がサブプライム問題でひとつの転換点に立った、と考えるのは私だけだろうか？

苦境が伝えられたシティグループを救ったアブダビ投資庁（アラブ首長国連邦）、同じく苦境のメルリリンチを支援したテマセクホールディングス（シンガポール）、モルガンスタンレーに投資した中国投資（中国）、スイスの大手銀行UBSを救ったシンガポール投資銀行（シンガポール）、アメリカ経済の凋落と中東とアジアの時代の幕開け。時代の潮目という冷徹な事実が透けて見えていないだろうか？

## 032 『友あり、道あり、誓いあり、』

---

熱あり、つらぬく若さあり、  
まごころありて、まことあり、  
感激ありて、涙あり、  
闘魂ありて、勝利あり、  
のぞみぞありて、夢もあり、  
おお わが母校 尾道商業  
まなびやありて、ああ われらあり』

3年間を過ごした母校の校歌は三好達治の作詞だったことを除くと忘れてしまったのに、なぜか、この尾道商高の校歌は忘れないから不思議である。

なぜ、こんなことを思い出したかというところ、このごろ、好きだったフランス国家「ラ・マルセイエーズ」の日本語訳を読む機会があったからである。

『いざ祖国の子らよ、  
栄光の日は来た！  
われらに向かって、暴君の、  
血塗られた軍旗は掲げられた！  
血塗られた軍旗は掲げられた！  
聞こえるか、戦場で、  
あの獯猛な兵士どもがうなるのを？  
やつらは我々の腕の中まで  
われらの息子や仲間を殺しにやってくる！  
武器を取れ、市民諸君！  
隊伍を整えよ！  
不浄な血が我々の畝溝に吸われんことを！』（第1節）

国際大会で聞くたびに、自分が知る国歌の中ではいちばん好きだった曲が、こういう歌詞だったことを知らなかった！ これを、小学校に通う子供たちまでが歌っているのか、と考えると複雑な気持になる。

『震えよ、暴君ども、なんじら裏切り者よ、  
あらゆる党の名折れよ、  
振るえよ！なんじの親殺しの企みは、  
ついにはその報いを受けるだろう！  
ついにはその報いを受けるだろう！

すべての者がなんじら戦う兵士、  
われらの若き英雄たちが倒れば、  
大地が再び彼らを生み出す、  
なんじらに対して皆戦いの用意はできている！』（第4節）

当初『ライン軍のための軍歌』と呼ばれたこの曲はリールという作詞と作曲を趣味としていた大尉によって、一晩で仕上げられた。その作詞作曲の一夜の営為を、詩人であり伝記作家でもあったツヴァイクは、『一晩だけの天才』（『人類の星の時間』みすず書房所収）の中で描いている。

歴史の転換点となった出来事の裏には、こうした“人類の星の時間”と言っていいようなひとときが必ず存在する、とツヴァイクは言う。無数の無名の人間が存在したからこそ現れた天才ともいべき人間がその命を燃焼させた忘れがたい瞬間があるのだと。

しかし、それは必ずしも幸せを運んできたわけではない。

1789年のフランス革命の勃発から3年後の1792年の4月26日、下劣な内容の軍歌が歌われる宴会場から抜け出したリール大尉は一夜でこの歌を仕上げるのだが、その歌は4日後、地元の軍楽隊によって披露されたまま忘れ去られてしまった。その歌が『ラ・マルセイエーズ』として復活したとき、そこには彼の名はなく、いつの間にか革命を歌った詩人は反革命分子として牢獄につながれ、1794年のロベスピエールの失脚がなければ、断頭台の露と消えていたのである。

このほか、パナマ地峡を踏破し、西洋人として初めて太平洋を見たバルボアを描いた『不滅の中への逃亡』、コンスタンティノーブル（現在のイスタンブール）陥落の瞬間や、ワーテルローの戦いで天才ナポレオンが喫した不覚など、『人類の星の時間』はなかなか面白い1冊であった。ただ、難を言えば、訳があまりに直訳的過ぎて、私の頭では理解できない部分が多かった。

### 033 『夜が来るなんて、

大都会に灯が入るなんて、  
冬が来て、やがて春が来るなんて、  
雲が行き、あわただしく雨が石の舗道を濡らすなんて・・・、

空気のうまさ、肺の健康さ、時計の動き、  
働きに出る人々・・・、

太陽の光を浴び、窓辺でものを思い、  
恋に悩み、野心にゆらぐ、  
青空を見、鳥の声に心打たれる・・・、

これ以上に心ときめくことがあるだろうか！』

もう20年以上も前に夢中になって読んだ辻邦夫の小説の中に、確か、こんな言葉があったはず。ノートに書き留めたはずだと思い、アルフレッド・ランシングの『エンデュアランス号漂流』（新潮文庫）を読みながら、何度も思い立って探してみたが、だめだった。

オーロラ撮影のためにアラスカ山脈で1ヶ月間テント生活をした写真家の星野道夫氏（故人）が原文で読んで感動し、それを手渡されたフリー編集者の青木久子氏が新潮社に持ち込んで1998年に翻訳出版されたこの『エンデュアランス号漂流』が、アメリカで発行されたのは1959年のことだ。今から50年も前。実際に起こったのは、1914年から16年、90年以上前のことである。

あとがきによると、星野氏は原文を3日間で読破したそうだが、こちらは翻訳版に1週間以上を費やしてしまった。

「船はもう駄目だ。下船するぞ」

初の南極大陸横断を目指して流氷の中を航行していた「エンデュアランス（忍耐）号」が流氷に押しつぶされ、船を放棄、氷の海に取り残されるところから、このドキュメンタリーは始まっている。乗っていたのは船長のシャクルトンを含めて28名。その28名が奇跡の全員生還を成し遂げるまでの1年5ヶ月が、生き残った全員の日記と手紙、インタビューによって再現されている。

アムンゼン隊から1ヶ月遅れで南極点に達したスコット隊5人が、帰路次々と倒れ、一人も生還できなかったのに比べ、シャクルトン隊は28人全員が生還を果たす。恐らく生きては帰れないだろうと思わざるをえない同じ運命に立ち向かいながら、彼らは生き残ることで失敗をはるかに凌ぐ偉業を達成した。特に冷静な分析と決断で28名を率いたシャクルトンには、いつも歩兵の先頭に立って、常に最前線を突き進んだハンニバルが重なる。リーダーシップとはどういうも

ので、どうあるべきか？ 今の首相に煎じて飲ませたいような1冊である。

「これはわたしの忠告ですが、自分ひとりで立とうとせんことです」

「しかし——」

「しかし何もありません。人間にとって最も致命的なことは、ひとりで立とうとすることです」

コーブランド医師は教えさとするように言った』

(カースン・マッカラーズ『心は孤独な旅人』)

”ひとりで立つ”ということとは、どういうことなのか？ いまだにわからないのだけれど、南米大陸に人生の再生を賭けて挑んだ136人の軌跡を追いながら、それが少しはわかったような気がした。

1968年(昭和43年)、横浜港を出港した「あるぜんちな丸」で南米移民として日本を捨てた乗船者136人を31年にわたって追いつけた元NHKディレクター、相田洋の『移住31年目の乗船名簿 航跡』(NHK出版)を、やっと読み終えた。

総ページ数が550ページを超える大著で、購入したのは2004年だから、4年を要してしまったことになる。

本著を開いては数ページ読んで閉じながら、そのたびに、さすがはNHKだなあと考えたものである。

相田氏がカメラマンと音声マンと3人で横浜港に停泊する第29次航あるぜんちな丸に乗り込んだのは1968年3月2日。

ベネズエラ、ブラジル、アルゼンチンに移住する136人を追っての密着取材も大変な作業なのだが、彼はその10年後の1978年、20年後の1988年、31年後の1999年と、4たびにわたって、同一人物を南米大陸に訪ね歩くのである。民放では、とてもではないが、こうはいかなかったにちがいない。

「理想の村」建設に夢を賭けた69歳の元県会議員、牧場主を目指し15年で300頭の牛を飼いたいと語る農林学校卒業生、写真でしか見たことのない夫のところに向かう移住花嫁、学生結婚をしてアマゾン流域に入る夫妻、再び海外移住を余儀なくされた満州開拓団からの引き上げ者、修理工具を積んでブラジル中を巡回修理に回る夢を語る青年、ブラジルで美容院を開くという女性、花栽培を夢見る青年……。

「人間として生まれたからには、一度は夢を描き、すべてを賭けて戦いたい！」

取材陣に手を振って、希望に溢れ、それぞれの港で下船していった136人を待っていたのは、どんな人生だったのか？

## 035 『楽しい。苦しい。きもちいい。』

---

甘い。苦い。しょっぱい。くすぐったい。かゆい。寒い。暑い。なまぬるい。  
いったいわたしは、どんなふう生きてきたんだっけか。』

川上弘美の『センセイの鞆』（文春文庫）は、1時間もあれば読めてしまうが、せつなくて、どこか温かい文章が、ちょっぴり人生を振り返らせてくれた。

「キミは女のくせに一人でこういう店に来るんですね」

駅前の居酒屋で見知らぬ男から声をかけられたとき、主人公は名前も思い出せないその高校時代の先生を“センセイ”と呼び、それはセンセイとの別れの日まで続く。

読んでいると、近頃とんと縁遠くなってしまった居酒屋というものが、懐かしく思い出された。居酒屋にはどこにも共通した独特の雰囲気があり、前後左右から聞こえてくる罵声や繰り言もバックミュージックのようで、とりとめのないことを、それでも真剣に語るには最適な環境だった。

“センセイ”という言葉も、どこか懐かしく、それも心に染みた。

小学校時代の太石センセイ、中学校の校長だった山本センセイ、高校時代の倫理社会の担当だった吉田センセイ、大学時代のゼミの担当教官だった池島センセイ。一昨年に亡くなられた太石センセイ以外は、消息も知れないのだけれど、今でも「センセイ」と呼びかけてみたい気がする。

センセイと呼べるのは、別に学校のセンセイだけではない。

振り返れば、人はたくさんのセンセイに励まされ、勇気をもって生きてきたはずだ。そして、そのことが分かるころは、もう会えなくなっている。

『憂きことの　なおこの上に積もれかし、

限りある身の　力試さん』（山中鹿介幸盛）

ガリ版刷りした赤茶けたプリントを配り終わると、教壇にすつくと立って、この言葉を読み上げた吉田先生。僕は今でも、覚えています。



形ある無しに関わらず、  
必ずや代償として、何かを喪わなければならない、  
という地上の鉄則について』

いつも、何かを始めるときには、この言葉について考えてみたつもりだ。

1989年、つまり平成1年に、ある雑誌を始めようとしたときも同じ気持だった。

ある友人が「2億は無理だけど、1億だったらいいと言ってるけど、どうする?」と言ってきたのだ。50万とか100万と言うのならまだ理解できただろうが、その金額を聞いて、なかったことにしてもらった。有限会社の最低資本金400万円を抛出するために200万円を下ろすと、預金通帳にもうお金は残っていなかった。それでも平気だった。“少年の夢を失ったら、まあ、一卷の終わりだね”と思っていた（今でも、思っているけれど）からだ。

そんな自分が頑張っていた（と思っていた）時代が、こんな時代だったんだと改めて教えられたのが、この本（田中森一・宮崎学共著『必要悪』／扶桑社）である。

日本の第一次バブル（著者は1987年から90年にかけてのバブルをこう呼び、近年のITバブルを第二次バブルと呼んで区分している）期に、特捜検事から闇世界の弁護人に転向してヤクザの弁護士となった田中森一と、もともとがヤクザの息子で、地上げ屋として活躍(?)した宮崎学。その二人が、対談形式で、バブルに踊らされた時代を分析してみせてくれる。

そういえば、伊豆高原に白亜の3階建ての別荘を建てた（何度も遊びに行き、泳げるくらいの風呂に入れてもらった）り、2億だったか3億だったか、いずれにしろ億単位のマンションを買ったという知人からの電話連絡を受けて、うらやましく思った記憶はある。

「1,000万預けなさいよ。仕事しなくても食っていけるようにしてあげるから」 そう言ったテニス仲間の女の子(確か八重洲の証券会社に勤めていた)がいた。

そういう時代だった、ということは認めよう。けれど、本当にあの時代、この本に書かれているように、みなみな、金、金、金に踊らされていたのだろうか？ 大多数は、もっとひたむきに、仕事をしていたように記憶する。自分のこと言うと、給料日が来て楽しみだったのは、買いたいと思ってめぼしをつけておいた本を買いに、笹塚にあった三省堂書店に、昼休みを待って行くことだったし、それを喫茶店で食事をしながら読むのがなによりの楽しみだった。車だってシトロエンの中古だったし、しばらく止めておくとバッテリーが上がって動けなくなるようなしろものだった。

だから、新幹線で新大阪から東京に向かったまま消えてしまった男の話や、ロッキード事件で田中までは逮捕しても、中曽根までは行かないことに決まっていた話、ホテル・オークラの最上階の全部屋を借り切ったバブル紳士の部屋の牛乳風呂に浸かりにくる安倍晋太郎の話など、ここ

まで書くのか、と思うような話は、それはそれで面白いけれど、だからどうなの？ と問わずにはられない。

ただし、こういう世界もあるということを、いや、これが現実の世界かもしれないということを知っておくのは損なことではないのかもしれない、とは思う。

いや、そうじゃない。やっぱり、知らないなら知らないでいたほうが幸せというものだろう。お金はあるに越したことはないけれど、お金があったからといって、こういう人達のように生きて、どうなのよ。

と、やっぱり言いたい気分なのだ。

二人の言う、日本人の“情”というものが、バブル崩壊の中で消えていったという意見にも同意できない。かつての悪党はたとえ前科があっても、心優しかったし、人の心の痛みがわかった、というのだが……。

ファンド立ち上げ時のアドバイザーとして、その人脈と経済分析で村上ファンドを支えたはずの植草一秀（元早大専門職大学院教授）が手鏡事件で逮捕されたとき、いの一番に求めた植草の助けを即決で断った村上世彰。小泉首相や自民党から衆院選を応援してもらっても、だからといって小泉等にびた一文金を渡したりしなかったライブドアの堀江貴文。彼らが周りに群がる政治家や弁護士に余禄を分け与えなかったからと言って、“情”がないというのは、どういうものか。ITバブル紳士と言われた人種の経済合理性（自分は儲けても他人にはびた一文渡さない）は、それはそれとして(だからこそ、逮捕の憂き目にあったにしても)立派なことではないのだろうか？

青空の下で本が読める季節になった。

夏の海辺での読書もそうだけれど、自然の空気の中になると、著者の言いたいことを素直に受け取れる気がするの、わたしだけだろうか？ 素直に受け取れるという表現はちょっと違って、よりコミュニケーションできる、という表現が当たっているのかもしれないのだが・・・。

米原万里が、ベストセラーになった『米原万里の「愛の法則」』（集英社新書）の中で、そのコミュニケーションということに触れて、言葉を伝えることの難しさについて書いている。同時通訳者として、瞬時にロシア語から日本語に言葉を手渡すということを職業としてきた著者にとっても、話し手の真意を聞き手に正確に伝えるというのは、大変な作業だったということがよくわかる。私たちが、日常、日本語を介しての会話の中でさえも、本当のことはなかなか伝えきれないのだから、それは当然のことなのかもしれない。

だから、しょせん、通訳でも、英会話でもそうなのだが、結局のところ、コミュニケーションというものは、非常に不確実なもので、最終的に完全に一意するなどということはないという、一種の諦念というべきか、覚悟を持って臨むべきだ、というのが、著者の伝えたかったことだったのだと思う。そして、だからこそ、理解し合えた、分かり合えた、コミュニケーションできたと思える瞬間が尊いのだと、言いたかったのではないかと、一方的に理解したつもりになってるだけかもしれないのだが）。

さて、理解し合えたというのは、どういうことか？ ということに触れて、「それは、一緒に笑え合えたときだ」と著者は言っている。

とすれば、私も理解し合えたのかも知れない。次のようなエピソードに笑えたからである。

ペロウの童話集に出てくるという“三つの願い”というおとぎ話が、こんなふうで紹介されている。

『あるところに、働き者だが、いかんせん貧しくて毎日ひもじい思いをしている夫婦がいました。それでも、日々神様に感謝する気持は忘れずに、欠かさずお祈りをしていました。

そんな二人に神様も心を動かされたのでしょう。ある日、お祈りをしていると、上の方から神様の声がして、“どんな願いでも三つだけかなえてあげよう”と言うのです。

二人はなかなか信じられないのですが、あまりにお腹が空いていましたから、だめもとで思っ、奥さんのほうが、“ここにゆでたてのソーセージがあったらいいわ”と言うのです。

すると、大きなゆでたてのソーセージに乗ったお皿が出てきました。二人はびっくりしますが、とにかくお腹が空いていますから、奥さんが早速食べようとします。

ところが、それを見た、ご主人。たった三つしかない願い事をソーセージなんかに使われてしまったものですから、怒りまして、

“ソーセージなんかおまえの鼻にくっつけてしまえ！”と叫びます。

すると、奥さんの鼻にそのソーセージがくっついてしまいます。これが2つ目の願いです。

奥さんはソーセージが顔にくっついて“痛い、痛い”とわめきます。でも、取れません。それで”どうか、顔を元通りにしてください“とお願いするしかありませんでした。

たちまちソーセージは跡形もなく顔から消えましたが、これが3つ目の願いです。二人は元通りのみすぼらしい生活に戻りましたとき』

もうひとつ、これも、笑えました。

『五年くらい前に、ニューヨークのハーレムでこんな事件が起きました。

黒人の浮浪者の前に、やはりいきなり神様が現れて、三つの願いをかなえてやると言われたんです。

彼は迷うことなく、次のように叫んだそうです。

“白くなりたい“、”女たちの話題の的になりたい”、“いつも女の股ぐらにいたい”

すると、たちまち男の姿は消え去り、路上にはタンポンが一個転がっていたというんです』

迎えたからといって、原理としてのマルクス主義はいささかも揺らぐことなく、人間の根源にかかわる巨大なスケールの哲学としてそこにあるんだ。』

康芳夫の言葉の中に、このような言葉が出てきてびっくりするとともに、考えさせられた。ナチズムがヒトラーによって現実的応用を間違われてしまったように、マルクスの哲学もソ連邦を中心とした現実的な応用面で失敗しただけであって、そこに内包されていた問題がそれによって霧消してしまったというわけではない、と言うのである。

確かにソ連邦の崩壊によって、アメリカ流資本主義が勝利したとされ、日本でもグローバルスタンダードの推進が喧伝された。小泉政権が推進した規制緩和も、その流れに沿ったものだったわけだが、結局それは“権力のある富裕層が弱者や貧困層を利用する新たな手段でしかなかったのではないか”という疑念が生まれつつあるというのが現実ではないのか？

それにしても、康芳夫という人物は、なんという人間だったのだろう。こんな人がいたのかという驚きだ。

カシアス・クレイ（モハメド・アリ）の世界ヘビー級公式戦の日本開催をはじめとして、人かサルかと騒がれたオリバー君来日、人食いトラ対空手対決（これは実現しなかった）、アントニオ猪木対アミン大統領タイトルマッチ（これも実現しなかった）、猪木とアリの格闘技世界一決定戦、ロス五輪・テレビ朝日独占放映権獲得、ネッシー探検隊、ノア方舟探索プロジェクト等のプロデュース、プロモートが、康芳夫という一人の人物の手で行われたのである。

同じように、川内康範、石原豪人、糸井貫二という、強烈な個性を發揮して生きた人物の存在を教えてくれたのが、竹熊健太郎の『箆棒（ベラボー）な人々』（河出文庫）だった。

森進一が『おふくろさん』の歌詞を改変したことで激怒したとして話題になった川内康範も、このインタビュー集の中で、こんなふうに語っていて、これまでマスコミで伝えられていた政治的右翼、民族派の怖い人間というイメージばかりではないことを知った思いだ。

『現憲法はアメリカに押しつけられたものだと言う人がいるけど、そうであっても第一条と第九条を死守する、世界中が戦争をしてもわが国はしないとイえる必要がある。（中略）アメリカから押しつけられたものであっても、いいものであればわれわれは守っていけばいい。（中略）二度とどんなことがあっても、戦争はあっちゃいかん』

## 039 『言葉を用いるべきときではなかった。』

---

みんな、胸いっぱいになっていた。われ知らず、目から喜びの涙が溢れ出てきたことを、はっきり認めよう。やっとのことで長い待ち時間が終わり、救援がやって来たと思うと——アザラシ狩りとも、悪臭を立てる獣脂の煙とも、ソリの旅とも、ブリザードとも、凍傷だらけの手や足ともこれでおさらばできると思うと、あまりにうれしすぎて現実とは思えなかった』

近づいてくる救援隊の姿を見つけたときの思いを、ロス海支隊の一員だったジャックは日記に、そう記した。

南極探検といえば、一番乗りを果たしたアムンゼンと、そのアムンゼンから1か月遅れで南極点に達しながら帰路に遭難死したスコットの名前があまりに有名だ。が、近年になって第三の男シャクルトンの存在がクローズアップされるようになった。結局、一度も南極点に到達できなかったにもかかわらず……。2年半の南極海漂流後、探検船エンデュアランス号の乗組員28名を全員無事帰還させた男として。

しかし、実はそのシャクルトン本体とは別に、本隊支援の食糧基地設営のために南極を本隊から逆に極点に向かった10人の男たちがいたのである。それが、3人の殉職者を出したロス海支隊だった。

本隊のシャクルトン隊は沈没して、南極大陸横断に出発もできなかったにもかかわらず、支隊の彼らは、本隊が帰還するために必要な食糧基地を次々と建設し続け、約束の期限内に任務を遂行したのだった。本隊の遭難を一切知ることもなく……。

そして、“全員生還”というシャクルトン隊の栄光の影で、彼ら10人の奮闘は歴史の中に埋もれようとしていた。

それを、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、南極にまで取材し書き上げたケリー・テラー＝ルイスという女性作家にまずは拍手を送りたい。『シャクルトンに消された男たち』（文藝春秋）は、そう思わせる1冊であった。

## 040「街角に帽子を持って立ち、

---

使わなかった数分があったら、お恵みくださいと通行人に頼もうかと思っとるよ」

死に急ぐ若者たちのニュースに接するたびに思い起こすベレンソンの言葉。イタリアの山荘で隠遁生活をしながら94歳で亡くなるそのときまで日記を書き続けた美術史家バーナード・ベレンソンが直前に訪ねた愛弟子ケネス・クラークに語ったとされる言葉である。

おじの葬儀を終えて、帰ってきて、改めてその言葉を噛みしめた。

お茶摘みが終わり、まばゆいばかりの新緑が村の畑を包んでいる。桃の袋がけが終わり、受粉が終わったキウイの摘果、葡萄の芽かきと巻きひげ取りが続く。みかんも白い花がもうしばらくすると開くだろう。

信州伊那谷に暮らす詩人で作家で墨彩画家の加島祥造の詩集『求めない』（小学館）をばらばらとめくる。

「求めない――  
すると  
いまじゅうぶんに持っている気づく」

「求めない――  
すると  
それでも案外  
生きてゆけると知る」

「求めない――  
すると  
自分の好きなことができるようになる」

という、国民に責任を負うべき政府の主要業務が「民営化」され、市場の論理で回されるようになった時、はたしてそれは「国家」と呼べるのか？

2001年にノーベル経済学賞を授賞したアメリカの経済学者スティグリッツが『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』を発表したのは2002年だから、6年も前のことになる。久しぶりに上京した往復の新幹線の中で、堤未果の『ルポ 貧困大国アメリカ』（岩波新書）を読みながら、早くスティグリッツの上著書も読まなくてはと思った。

アメリカ野村証券に勤務中、9・11同時多発テロに遭遇し、隣のビルからビル倒壊を目撃したことをきっかけにジャーナリストに転向した著者は、「弱者」が食い物にされ、人間らしく生きるための生存権を奪われた挙げ句、使い捨てられていく“自由で豊かな”アメリカの現実をひとつひとつ追っていく。

グローバルスタンダードを追うとしてそのアメリカの後を追った日本でも、今、日本国憲法が保障する、“健康で文化的な最低限度の暮らしを営める権利”が浸食されようとしているが、アメリカではもっと早くから、それは始まっていたのだ。

いまや戦争さえが民営化され、現アメリカ副大統領チェイニーがCEOを勤めた石油サービス・建設企業ハリバートン社傘下の民間戦争請負会社が、インドやスリランカ、ネパール等の貧困層をターゲットに派遣社員を募集して、イラクの戦場に送り込んでいる現実が、そこでは指摘され、彼らは米軍ではなく民間人であるため、アメリカ軍の死傷者の数にも数えられていない現実が突きつけられる。それが明日の日本の姿でないことを願うばかりだ。



見るんじゃないかなってわ。

この山に登れば、すばらしい夕焼けが見られるなんて言葉に乗せられて、夢見たりするから、こんなことになるんだわ』

確か、そんな文章だった。

辻邦生の作品の中で読んで、忘れずにきたものだが、その出典がどうしても確認できない。残してきた作品を手当たり次第に斜め読みしたのだが、見つけることができず、今日で諦めることにした。

だから、上記の文章も、こんな感じだったというくらいで、まったく自信はない。

夕焼けを見ようと兄に誘われた主人公は、山登りなどしたこともないのに、その素晴らしい夕焼けの話を信じて兄の後ろについて丘に登るのだった。だが、夕焼けは一瞬後には、赤黒い雲に覆われた空に一変し、瞬く間に夜が忍び寄る。二人を待っていたのは、暗さを増す夜道を転がるように下る長い長い時間だった。

なぜ、こんなことを思い出し、その文章を探したかということ、その夕焼けの一瞬を、“マジックアワー”ということ、三谷幸喜監督作品『ザ・マジックアワー』を観て、教えられたからだ。

日没後の一瞬、高い鱗雲が一面に浮いているようなとき、地上は夕闇に包まれつつあるのに、高度のあるその雲に沈んだ太陽の残光が差し込んで、ほんの一瞬、空一面を真っ赤に染める瞬間がある。それが、“マジックアワー”と呼ばれる一瞬であり、映画はそれを転じて”誰にでもある人生で最も光り輝く一瞬“として描いていく。

しかし、その瞬間は本当に一瞬だ。犬を連れて散歩に出ようとして、そんな空一面の夕焼けに一度だけ出会ったことがある。犬を柱にくくりつけて部屋に飛んで入り、カメラを抱えて飛び出したときには、「まさか」と声を出してしまったほど、見上げた空は暗く、西の空の一面にわずかな赤黒い雲が浮かんでいるだけだった。そのときの落胆というか悲しみを今でも忘れることができない。

「マジックアワーを逃してしまったとき、どうするのか、君は知っているかい？」

柳澤慎一演じる1作品の主演を最後に消えてしまった“かつての映画スター”が、主人公（佐藤浩市）に語る場面がある。

「明日を待てばいいんだよ。明日になれば、必ずマジックアワーはやってくる」

しかし、経験で言うのだが、そんな夕焼けの瞬間を、わたしはまだ2回しか見たことがない。



暮らしなさい』

(小笠原の父島で暮らすサトウ・ハチローのもとに届いた母親からの手紙の一節)

まだ梅雨明け宣言が出されないが、窓からのぞくと真っ青な青空が広がっている。気温は今日も30度を超すという予報だが、やっぱり夏は青空がいい。

青空はいいけれど、新聞をのぞくと、ろくなニュースはない。

親に怒られたという理由でバスを乗っ取った少年、防衛省の裏帳簿破棄、教員汚職と、相変わらずのガソリン代高騰。

新聞は、なぜ、もっと人間のよい面を拾わないのだろうか？

『人生において重要なのは、いかに進歩すべきかを知ることではなくて、辛抱強く働き、気高く堪え忍び、そして幸福な生活ができるように、吾々の人生をいかに整理すべきかを知ることである。

・・・金銭や名誉のためのあらゆる空しき闘いの後には、人生は主として実のある或る事柄に還元される。例えば  
うまいもの、  
良き家族、  
苦勞のない平和な心、  
寒い朝の一杯の粥。

その余は空の空なるものにすぎない』（『支那のユーモア』の著者・林語堂）

## 044 『弾いたメロディは弾かない。』

---

通った道は通らない』（ピアニスト・上原ひろみ）

日本で初めての本格的なテニススクール校長として、  
日本で初めての本格的なテニスショップの店長として、  
日本で初めての本格的なテニス専門誌の編集長として、  
日本で初めての女子テニス団体戦（フェドカップ）監督として、

戦後の日本テニス界で道なき道を切り開き、この6月1日に逝った宮城黎子さんを“偲ぶ会”が25日（金）に緒方貞子さんが発起人となって東京帝国ホテルで開かれた。

縁あって、その下で9年間働いた。

テニスと、編集と取材のいろはを教わった。

緒方さんや正田美智子さま（現皇后陛下）のコーチをされ、シングルスとダブルスを合わせて30個の全日本タイトルを獲得、テニス界の大御所といえる立場にもかかわらず、常に相手の目線までおりてきて物事に向き合う人だった。

ネットを挟んで行き交うのは、単なる黄色いボールではなく、勇気とガッツなのだ、ということを見せていただいた。

弱気になる自分の心に打ち勝って、まずは土俵に上がっていかなければ、何事も始まらない、ということが無言のうちに教えられた。

縁あって口述筆記することになり遺本となった『宮城黎子の昭和テニス史』（日本文化出版 5月1日刊）の完成を見届けて逝かれたことが、せめてもの慰めである。

「テニス、やってるの？ やらきやだめよ！」

その声が今も聞こえる。

我々が一般的にそう思っているよりずっと多くの謎が潜んでいるのではないだろうか？

誰か他人のことをきちんとわかっているなどと本気で言える人間はどこにもいない。それがたとえ何年も起居を共にしている相手であったとしてもである。

我々の内なる人生を構成するものについては、我々はもっとも親しい相手にさえその断片しか伝えることができないのである。その全体像は伝えることができないし、相手も理解することはできないだろう。

我々は隣人の姿さえはつきりと見極めることのできないこのような薄暗がりの如き人生をともに手探りでふらふらと進んでいる。

ただときおり、我々がその道連れとともにした何かの経験とか、相手が口にしたふとした発言とかによって、まるでパッと閃光に照らし出された如く、その相手と我々がぴったりとくっつくようにして立っていることを一瞬知ることがある。

そのようなときに、我々は相手のあるがままの姿を見るのだ。

そのあと、我々は再びともに暗闇の中を歩いていく……。

おそらく長い時間。

そして、その仲間の旅人の姿を見極めようと努めるのだが、その思いが果たされることはない』 (アルベルト・シュヴァイツァー)

帯に書かれた「こんなに読書にのめりこんだのは、『嵐が丘』を読んで以来です」の文章は嘘ではなかった。重いテーマだし、それによって元気が出るとか、さあ明日も仕事に頑張るぞと励まされたわけではないが、『メモリー・キーパーの娘』(NHK出版)は、まさに一気呵成に読ませる長編だった。一気呵成とは言っても3日間かけてしまったけれども、私にしてみれば、こんなに根を詰めて、本に向き合ったのは、久しぶりのことだった。

たったひとつの嘘によって、それに関わった人々の人生がどう変わってしまったのか？ “フィービ”と名付けられた一人の女の子を巡る25年の物語が綴られた546ページをめくりながら、上のシュヴァイツァーの言葉を何度反芻したことだろう。

ありがとうございます、  
ありがとうございます』

マーク・キーエン（フロリダ大学の遊撃手）。オークランド・アスレチックスからドラフトで指名されたときの喜びの声。“背が低すぎてプロには向かない”と自チームのスカウトが言うのを押し切って、ビリー・ビーン（アスレチックスのGM）は、5位で指名した。

『ありがとうございます。ちょっと、いったん電話を切らせてもらっていいですか？』

1位指名を告げられたジェレミー・ブラウン（アラバマ大学の捕手）は、そう言って電話を切って、数秒後、スカウトに電話をかけ直した。大学の友人が悪ふざけをしているのではないかと疑ったからだ。相手が本物のスカウトだとわかったあとも、そのことはガールフレンドと両親にしか告げず、「誰にも口外しないように」念を押した。

マイケル・ルイスは、メジャーリーグの名ゼネラル・マネジャーとされる、ビリー・ビーンの人となりについてドキュメント風書き上げた『マネーボール』（ランダムハウス講談社文庫）の中で、彼によってメジャーリーガーへの扉を開かれた選手たちを描いている。

“この選手はいい体をしている”、“今回のドラフトでは最高の肉体の持ち主だ”

そう繰り返す古株のスカウトたちの言葉を遮って、ビーンは、主張する。

「われわれはジーンズを売っているわけじゃない」

そう言って、

自軍のスカウトが「背が低すぎ」「やせすぎ」「太りすぎ」「足が遅すぎ」「速球が走らない」「パワー不足」と切り捨てた選手、「指名されるはずがない」と諦めていた選手を、本物の野球選手と見込んで獲得していった。

“野球はスポーツではなく金銭ゲームになってしまった”と言われるほど、チーム間の貧富の差が大きく、優秀な選手を集め育てられるのは金持ち球団だけであり、資金の乏しい球団はどこか欠点を抱えた選手しか集められない、という現実が突きつけられている中で、メジャー全チーム中最低クラスの年俸チーム（ヤンキースの3分の1）でロッカールームの清涼飲料水も有料というチームの、それが生き抜くための戦略でもあった。

この本を読んで、2002年のドラフトでビリー・ビーンによって指名された選手たちのその後を知りたいものと思ったが、残念ながらわかったのは以下の3選手だけだった。

●ニコラス・スウィッチャー……（オハイオ州立大・一塁手）右翼手として2005年にレギュラーに定着。2008年に交換トレードでホワイトソックスに移籍。

●ジョー・ブラントン（投手）・・・2005年から先発ローテーション入り。2008年はエースとして日本で行われた開幕戦レッドソックス戦に先発し松坂と投げ合ったが、6回途中3失点で降板。その後フィリーズにトレードされた。メジャー屈指のカーブが持ち味。

●ジェレミー・ブラウン（アラバマ大・捕手）・・・2002年ドラフト指名された選手の中でただひとり2003年のメジャーチームの春季キャンプに参加。ただの地味な選手から、一躍あの『マネーボール』のチームが選んだとびきりの逸材と騒がれたが、メジャー定着はできず。4度メジャーに昇格したが、出場は2006年の5試合で、10打数3安打、2本の二塁打。2007年のオークランドのトリプルAチーム・サクラメント在籍を最後に引退した。

以下の選手たちは、ドラフトから6年たった今、どうしているだろうか？

ジョン・マッカーディー（野手）

ベンジャミン・フリッツ（フレズノ州立大・投手）

マーク・キーエン（フロリダ大・遊撃手）

ジョン・ベイカー（野手）

マーク・キーガー（野手）

ブライアン・スタビスキー（野手）

ブラント・コラマリーノ（ピッツバーグ大・一塁手）

もし、彼らがすでに野球をやめていたとしても、それでビリー・ビーンの名が貶められるわけではない。

なぜなら、ビリー・ビーンがゼネラル・マネジャーに就任した1997年から2007年度シーズンの終了時点までの10年間に、アスレチックスは901個の勝利をあげているからだ。901個という白星の数は、ヤンキースとレッドソックスに次ぐ勝利数であり、その間に5度のプレーオフ進出が含まれている。

そして彼が野球界で実践したセイバーメトリクスという、野球においてデータを統計学的見地から客観的に分析し、選手の評価や戦略に応用するという手法は、現在、レッドソックスもヤンキースも、パドレス、インディアnz、ブルージェイズにも採用されているのである。

.....

「東條はもうだ駄目だね」

.....

「池田の息子を二人もとってやったと、言っているって聞いたものだから」

日米開戦を最後の最後まで食い止めようと計った池田成彬（せいひん）のもとに、長男・豊に続いて赤紙が来た次男の潔が出兵を前に訪ねてきたときの会話を、『我、弁明せず』（PHP研究所）の中で著者の江上剛は、このように描いている。

池田成彬は、激動の昭和の時代に三井財閥トップ、日銀総裁、大蔵兼商工大臣として活躍した男だが、アメリカと戦ったら勝てないという状況分析を譲らなかつたために時の宰相東条英機ににらまれ、憲兵隊の監視をつけられただけでなく、長男と次男を徴集された。それも、二人ともケンブリッジ大学卒だったために、日本の大卒は少尉での任官という特典があった中で、一番下の二等兵での招集であった。

この本は成彬の硬骨の人生をたどったものだが、その中で信念ということについて、随分と考えさせられた。

主人公の成彬のすごさは、長男・豊が入隊してすぐに東條からかかってきた電話への対応に集約される。

「内地での任務にしてもいいのだが」との申し出を、成彬は、きっぱり「断る」のだった。受け入れていけば、長男は中国戦線に送られず、安全な内地勤務に回されることがわかっているにもかかわらず、「私のやり方に反対する動きをやめていただきたい」という交換条件は、どうしても受け入れがたいものだった。

今、政治家に求められているのも、この信念のはずだが、いまやたけなわの自民党総裁選候補者たちの言葉からは、いかに経済を成長させるかという話ばかりで、この国をどうやってまともな国にするのか、どういう国がまともな国なのかという信念が見えてこない。

で、思い出したのだが、田中優子氏（法政大学社会学部教授）が新聞紙上で、次のような論語の一節を紹介していた。

「寡（か）を患（うれ）へずして均（ひと）しからざるを患ふ。  
貧を患へずして安からざるを患ふ」

氏はこれを、こう解説する。

（国の長は、土地や人口や物が乏しいのを憂えるのではなく、  
配分が均等でないのを憂えるべきであり、



貧困ではなく、人のところが安んじていないのを憂えるべきだ。  
なぜなら、均等であれば人々は自分が貧乏だと感じることはなく、  
心が安定していれば人は互いに和することとなり、  
人口が少ないことを心配する必要もなく、  
国が傾くこともないからだ。)

今、サブプライム問題に揺れるアメリカにも当てはまることではないだろうか？ 金融恐慌は避けなければならないが、その前にもっと考えるべきは、自由競争の弊害をただし、まともな人間がまともに暮らしていけるにはどうしたらいいかという視点だろう。自由競争こそが善とする金の亡者たちが、取っ払われた規制の末に何を成したか？を考えてみるがいい。

今のアメリカがまともな国だとは到底思えないのは私だけなのだろうか。

もちろん、事故米を食用米として全国の消費者に毒米をばらまいた三笠フーズを抱える日本にも、メラミン混入粉ミルク事件に揺れる中国にも同じように当てはまるはずだ。経済ばかりが優先され、自然も文化も顧みられない社会をまともな社会に作り直すという信念を持つ政治家はいないのだろうか？

極東軍事裁判の法廷に喚問せよ！』

なかなか、「うん、そうだ」と自らの膝を打つような言葉には出会えないものだが、この石原莞爾（戦前、満州事変の首謀者として2万人近くの関東軍を動かし、満州全土を軍事制圧し、2・26事件では反乱軍制圧の先頭に立った。東条英機を手厳しく糾弾した反骨の軍人として知られ、戦後は極東軍事裁判で戦犯指定から外されたが、「国際法は非戦闘員を爆撃してはならないとしているのに、トルーマンは一般住居を爆撃し、長崎、広島に原爆を落とした。トルーマンこそ第一級の戦争犯罪人である」と批判した）の言葉には、納得するものがあった。

なぜ、こんな言葉を持ち出したかというと、渡辺京二の『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）を読み終えて、そのあとがきに書かれていた著者の思いに納得したからである。

著者は「昭和の意味を問うなら、開国の意味を問わねばならず、開国以前のこの国の文明のありかを尋ねなければならない」として、明治の初め、そして江戸末期へと遡り、そこに生きていた日本人の姿を再現していく。それも、日本人の目を通してではなく、幕末から明治に日本にやってきた外国人の滞在記や著作というおびただしい数の未訳作品を渉猟することによって。

その膨大な労力に感動するのだが、そこに生きている幕末から明治期に生きた市井の日本人の姿にも感動する。

ペリーの下に開国し、明治維新後、西洋文明を追いかけて富国強兵の名のもとに突っ走った日本は太平洋戦争の敗北で倒れたが、戦後は、今度はアメリカ文化を追いかけて奇跡の復興を成し遂げた。

だがそれは、大きな代償の上に成り立っているのである。

それはいみじくも、あの開国の時代の日本にやってきた異人たちが予感したかのようだ・・・

。「この帝国におけるこれまでで最初の領事旗を掲げた。・・・疑いもなく新しい時代が始まる。あえて問う。日本の真の幸福となるだろうか」（1856年9月4日／アメリカ初代駐日公使タウンゼント・ハリスが日本上陸2週間後に著した日記）

「いまや私がいとしさを覚えはじめた国よ。この進歩はほんとうにお前のための文明なのか。この国の人々の質朴な習俗とともに、その飾りけのなさを私は賛美する。この国土のゆたかさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑い声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見いだすことができなかつた私は、おお、神よ、この幸福な情景がいまや終わりを迎えようとしており、西洋の人々が彼らの重大な悪徳をもちこもうとしているように思われてならない」（1857年12月7日／ハリスの通訳ヒュースケンの日記）

薩長連合によって成り立った明治政府は、打ち倒した江戸の文化、思想を全否定し、西欧化こ

そが善として近代日本を築いたのだが、そこまであった江戸文明や、その中で生きていた日本人の資質は果たして全否定されるべきものだったのか？ もし、そうだったとしたら、なぜ、このようにかくも多くの外国人たちをして、「明日の日本が、外面的な物質的進歩と革新の分野において、今日の日本よりはるかに富んだ、おそらくある点ではよりよい国になるのは確かだろう。しかし、昨日の日本がそうであったように、昔のように素朴で絵のように美しい国になることはけっしてあるまい」（『知られざる日本を旅して』近代登山の開拓者ウェストン）と嘆かせたのか？

明治政府によって打ち壊され、明治以降の日本人が失ってきてしまったものが確かにあるのだ。そして、もしそれらの一部でも日本人の心性の中に未だ眠っているのなら、それらを思い出し掘り起こし、未来へのエネルギーにしたい、と思うのは私だけではないだろう。

「日本には、礼節によって生活をたのしいものにするという、普遍的な社会契約が存在する。誰もが多かれ少なかれ育ちがよいし、『やかましい』人、すなわち騒々しく無作法だったり、しきりに何か要求するような人物は、男でも女でもきらわれる。すぐかっとなる人、いつもせかせかしている人、ドアをぼんと叩きつけたり、罵言を吐いたり、ふんぞり返って歩く人は、最も下層の車夫でさえ、母親の背中からだをぐらぐらさせていた赤ん坊の頃から古風な礼儀を教わり身につけているこの国では、居場所を見つけることができないのである。

・・・

この国以外世界のどこに、気持よく過ごすためのこんな共同謀議、人生のつらいことどもを環境の許すかぎり、受け入れやすく品のよいものたらしめようとするこんな広汎な合意、洗練された振る舞いを万人に定着させ受け入れさせるこんなにも見事な訓令、言葉と行いの粗野な衝動のかくのごとき普遍的な抑制、毎日の生活のこんな絵のような美しさ、生活を飾るものとしての自然へのかくも生き生きとした愛、美しい工芸品へのこのような心からのよろこび、楽しいことを楽しむ上でのかくのごとき率直さ、子どもへのこんなやさしさ、両親と老人に対するこのような尊重、洗練された趣味と習慣のかくのごとき普及、異邦人に対するかくも丁寧な態度、自分も楽しみひと楽しませようとする上でのこのような熱心——この国以外のどこにこのようなものが存在するというのか。

・・・

「生きていることをあらゆる者にとってできるかぎり快いものたらしめようとする社会的合意、社会全体にゆきわたる暗黙の合意は、心に悲嘆を抱いているのをけっして見せまいとする習慣、とりわけ自分の悲しみによって人を悲しませることをすまいとする習慣をも含意している」（1889年＝明治22年に来日し2年間東京麻布で過ごしたエドウィン・アーノルド）

実にひどいもんだ。この国もクソくらえさ。だけどナ、消防士ってのは、ほんもののなにかをやってるんだ。火事を消し、赤ん坊をかかえてとびだす。死にかけたやつには、口うつしの生きかえり方法をほどこす。それが実際に目にみえるんだ。いいかげんじゃ済まない。ほんもの相手だからな。おれには、そういうのが夢なんだ。

一度銀行で働いたこともあるけど、いいかね、ありや、ただの紙きれで、ほんものじゃない。九時から五時までなんてタマラないよ。数字ばかりにらんでさ。こっちはにらみかえして、こう言えるんだ。『おれは火事を消したんだ。人を救うのに手をかしたんだ』ってね。おれのやったことが、この地上にはっきりとのこるんだぞ、って」

スタッズ・ターケルが全米の115の職業にたずさわる133人を直接インタビューして書き留めた『仕事』（晶文社）の中に出てくるブルックリンの消防士のことばだ。仕事にも人生にもプライドをなくしてしまったような現代の世相だが、ニュースが伝えるのは実はほんの一部であり、多くの人がこのように、その仕事の中に個人的な価値を自覚して懸命に生きているのだということを思い知らされた一冊であった。

仕事というのは、夢なのだと思います、働いてきたつもりだけれど、立ち止まってみると、ほんとうに夢だったのだろうかと考えてしまう。夢だと思った瞬間もあったが、そうでない時間もたくさんあった。我慢して時間をただ浪費してしまったような気もする。それでも、自分の仕事にはどんなときもプライドは持っていたつもりだ。それだけは自慢してもいい。仕事として、厚生年金の標準月額や加入期間の改ざんに手を染めていた社会保険庁の職員というのは、一体全体何を誇りに、何を夢に仕事をしていたのか！？ と、聞けるものなら聞いてみたいものである。

著者ターケルは3年間を費やしてこの本を仕上げた。

「ふつうの人のふつう以上の夢にショックを受けた」と書いている。「時代がどんなにひどく、公けのことがどんなにバラバラでも、われわれが「ふつう」と呼んでいる人たちは、その仕事のなかに、それぞれ個人的な価値を自覚している」と。総ページ数705ページの大著に向かいながら、やっぱり仕事は夢なのだと思った。

思っていればいい。自分が最低と思っていれば、いくらでも学ぶことができる。自分が偉いと思っていると、人は何も言ってくれない。何も学ぶことができなくなってしまう』（赤塚不二夫）

紅白歌合戦を見て年を越したけれど、新年になったからといって、別段変わったこともなければ、心境に変化もない。外は風もなく、ガラス窓を通して差し込む日の光も温かな1日だった。これで、おだやかな日々が3日続いたことになる。今年は今ふうにおだやかに過ぎていく1年であってほしいものだ。

元旦ということでもいつも思い出すは、8年前に逝った父の誕生日だったことだが、今年はまだひとり、24年前に逝った岡村昭彦さんもこの日が誕生日だったことを思い出した。

まだ20代の後半だったころの一時期、著者と編集者という関係の中で仕事をご一緒させていただき、舞阪町（現・浜松市）にあった岡村さんの実家でたくさんの資料を拝見させていただいたことがある。報道カメラマンとしてよりもジャーナリストとしてヴェトナム戦争を記録した岡村さんはそのころダブリン（アイルランド）に居を構えていた。従軍したビアフラの独立戦争が敗北という形で終わり、北アイルランド紛争やエチオピアの干ばつの取材に飛びまわっていた時期だった。お願いした連載のタイトルは『アイルランドからの小さな報告』。

そのころの岡村さんの視点は、ケネディ家をはじめとするアイルランド系アメリカ人とヴェトナム戦争の結びつきを探ることに置かれていて、そのアイルランドの地から世界を見ようという企画だった。

その岡村さんが56歳の若さで亡くなられたとき、病名は敗血症だったのだが、私の胸の中ではヴェトナムと枯れ葉剤が結びつき、それが早すぎる死といつまでも重なって離れなかったのだが、そのことが突然昨年末から読み進めた『花はどこへいった』（坂田雅子／トランスビュー）を手に取るなかで甦ってきたのである。

『花はどこへいった』は、ヴェトナム戦争に従軍し後に報道カメラマンとして活躍した夫のがんによる死をきっかけに枯れ葉剤の映画を作ることを決意して渡米、映画制作を学んで2007年に映画『花はどこへいった』を完成させた著者が、自らの奮闘の人生を綴ったものである。

岡村さんと仕事をした駆け出しの編集者時代、海外物の取材原稿に使う写真を借用するため、頻繁に通った六本木にあったインペリアルプレスで、何度も顔を合わせていたはずの坂田雅子さんが、その著者であったこともまた驚きでもあり、懐かしくもあった。

最愛の夫はなぜ急死したのか？ を問い続け、映画制作を一から学んだ情熱、旧南ベトナム全土の12%に撒かれたと言われる枯れ葉剤の被害現場に脚を運び真実を見つめた勇気は、あの時代に生きた人間に共通のものなのだろう。米軍によって戦争を早めるという口実のもとに撒かれた枯れ葉剤は、同じ理由で広島と長崎に落とされた原爆同様、その下で生活していたベトナム人に

多くの犠牲者を生んだ（多くの奇形児が産まれた）だけではなかった。撒いた加害者であるべきアメリカ人にもそこで取材したジャーナリストや派遣医師団といった人々の間にさえ、未だに癒えない傷跡を残したのだ。

イラク、アフガニスタン、ソマリア、ダルフル、パレスチナ・・・、正義のための戦争はいつまで繰り返されるのだろうか？